

丁未孟夏

沈道張是洵

畢業論文
自由保護貿易得失論

楊樞

558.3
932
2



3 0790 4432 1

丁未孟夏

畢業論文
自由保護貿易得失論

楊樞



西儒有言經濟界發達之順序由內國貿易
進於外國貿易近世高戰劇烈雖於內國
貿易外國貿易兩者互為計畫而於外國
貿易尤特別注意經營蓋貧富之消長種
族之存亡皆持於此操其券焉至如於外國
貿易之政策有自由保護兩派持保護主義者
謂貿易者當以國家之權干涉之或禁其入
口或苛以重稅藉以收遏外國物產勢力之

增長而維持四國物產勢力之衰頹持自由
平義者謂貿易者須除去彼此之制限而委
私人以便宜俾得自由競爭兩派之弊視皆
持之有故余之啟理錢生此書即所以衡論
兩派之得失者又以書乃其在早稻中大學平
業時提出論及續者可以規其迭進之淺深
於以知博一學士之名位亦非倖致他日當言起
行將於此書卜之矣楊樞拜撰并書

序

自由保護貿易ノ可否ハ從來屢々論議セラレタル所ニシテ今日ニ於テハ既ニ其ノ問題ノ陳腐ナルヲ感ゼシムルモノアリ然レモ此ノ兩者ノ優劣ハ元ト絶對ニ斷ズベキニアラズシテ兩派ノ主張均シク傾聽ニ値ヒスルモノアルハ識者ノ首肯スル所ナリ乃チ知ル一國ノ商政ヲ案ズルハ決シテ柱ヲ漆シ舟ヲ刻スルノ陋ヲ學ブベキニアラズシテ達觀洞察時勢世局ノ如何ヲ審カニシ機ヲ臨ミ變ニ應ジ運用ノ妙ヲ一心ニ求ムルノ外ナキヲ清國留學生錢君應清自由保護貿易得失論ヲ著ハス亦々箇中ノ消息ヲ道破セントスルモノニシテ叙スル所周到論スル所公平予ハ其ノ好冊子タルヲ疑ハザルナリ因ツテ思フニ彼レ清國ハ泰西ノ新思潮ニ禔サスコト

遅カリシモ一朝翻然トシテ覺醒シ其ノ有爲青年ニシテ笈ヲ負フ
テ海外ニ遊ブ者刻苦勵精造詣淺カラズ若シ小成ニ安ンセズ今後
益々研鑽ノ功ヲ積マバ大著名作世ヲ益シ民ヲ利スル者續々梓ニ
上ボリ清國ノ開明遂ニ大ニ期待スベキニ至ラン則チ錢君ノ此著
ハ清國ノ爲メニ意ヲ強フスルニ足ルモノニシテ予ハ衷情誠ニ喜
悅ニ禁ヘザルナリ茲ニ序ヲ請ハル、ニ及ビ此ノ言ヲ書シテ以テ
錢君并ビニ其ノ他ノ清國留學生諸君ノ奮勵ヲ希フト云爾

早稻田大學學長 法學博士 高 田 早 苗

明治四十年七月

卒業論文 自由保護貿易得失論目次

緒言

第一章 外國商政ノ沿革

第二章 外國貿易上ノ二大主義

第一節 自由保護兩貿易ノ意義及ヒ其趨勢

第二節 自由保護兩主義之分派

第一款 自由貿易派

第二款 保護貿易派

第三章 自由貿易論者ノ主張點

第一節 自由貿易ハ分業ノ理ヲ完全ニスル利益アリ

第二節 自由貿易ハ個人天賦ノ權利ヲ保存ス

第三節 自由貿易ハ競争ヲシテ充分其勢力ヲ逞フセシムルガ故ニ産業

目次

ヲ發達進歩セシム

第四章 自由貿易ニ對スル反對論點

第一節 幼稚ナル産業ヲ放任スルハ自然物ヲ損傷スルト異ナルナキガ

故ニ不可ナリ

第二節 自由貿易ハ個人ニ利アリ必スシモ社會ニ利アラザルガ故ニ其

所謂權利論ハ薄弱ナリ

第三節 自由貿易論者ハ國家的觀念ヲ缺ク

第五章 保護貿易論者ノ主張點

第一節 保護貿易ハ其ノ國産業ヲ發達セシメ經濟上及政治上ニ於テ國

民ノ利益ヲ増進ス

第二節 保護稅ハ經濟界ノ激變ヲ防グ恐慌ノ救濟策トナル

第三節 國民ノ必需品及ビ戰時軍用品ヲ外國ニ仰グ可カラズ

第四節 外國品ノ輸入ニ對シテ課稅ノ必要アルハ內國産業ニ賦課スル

ノ租税ヲ補償スル爲ナリ

第六章 保護貿易ニ對スル反對論點

第一節 保護政策ハ所謂一般自然ノ通則ニ反ス

第二節 保護制度設置シタル以後ニ一日之ヲ廢止スルルハ企業家及ビ
勞働者ハ大ニ損失ヲ招クノ虞レアルガ故ニ容易ニ之ヲ撤去セ
ズ

第三節 保護貿易ハ人民ヲシテ依頼心ヲ增長タラシメテ獨立進取ノ精

神ヲ消磨セン

第四節 保護策上ノ輸入税ハ實際内國人ノ負擔ニ歸ス

第五節 保護政策ハ保護程度ノ不足或ハ過當ニ走リテ實際ハ不公平ノ

結果ヲ生ズ

第六節 保護政策ヲナスニ當リ自國ノ國土富源ノ程度ヲ省ミザルハ誤

策ナリ

第七章 斷論

第一節 國家ニ於ケル産業發達ノ程度及ビ社會生活ノ狀態

第二節 一國內經濟發達ニ於ケル歷史的順序

第三節 結論

卒業論文
自由保護貿易得失論

著者 錢應清

緒言

經濟上ノ原理原則ハ單ニ人ト自然界若シクバ廣ク人ト人トノ關係ニ於テ立
スルコトヲ得、其關係ハ何等國民ト云フガ如キ政治團體ヲ基礎トスルノ必
要ナキモノアリト雖モ國家ノ政策ト云フガ如キ、國民ノ經濟實體ヨリ其經
濟ノ理想ニ達セントスル方法手段ヲ講ズルモノニアリテハ必ズヤ國家ノ利
害ノ上ニ付テ立論ノ根據ヲナサザル可ラズ、而シテ今自由保護兩貿易ノ得
失論ト云フハ一國ノ外國貿易ノ上ニ自由主義ノ政策ヲ取ルガ利アルカ或ハ
保護主義ノ政策ヲ施スルガ利アルカヲ論ズルモノニシテ利害ノ標準ハ國民
全體ノ經濟ノ上ニ在ルガ故ニ之レガ論究ニハ必ズ常ニ國家ナル觀念ヲ腦中
ニ置カザル可ラズ個人ノ爲メノ國家ナリト雖モ亦國家ノ爲メノ個人タリ國

家ト個人トノ關係ハ兩々相持シテ其完全ヲ期スルヲ得可キノミ、故ニ國家ノ利益ナル政策ハ一時或ハ個人ニ不利益ナルガ如ク見ユル場合アリトスルモ永遠ノ大局ニ着眼セバ結局國民ノ幸福ハ之ニ依テ増進シ又其權力モ之ニ依テ膨脹スレバ國家ノ利益ハヤガテ個人ノ利益タル事ヲ解スルヲ得ベシ、サレバ今日對外貿易政策ヲ論ズルニ當リ國家ヲ前提トスベキハ實際上理論上正當ナル事ト信ズ然ルニ凡テノ國ハ世界上ニ於テ其歴史又其人種人口或其國産地勢氣候互ニ同カラザルガ故ニ其ノ取ル所ノ政策モ亦之ニ因テ差異アリ。斯ノ如キ各特殊ノ政策ヲ通則的ノ理論トシテ研究スルヲ困難ナリトセバ如何ナル學術ニテモ其原則ヲ發見シ研究セント欲セバ困難ナリト云ハザル可ラズ。何トナレバ各種ノ複雑ナル特性及現象ヨリ其共通ノ原則ヲ抽象セズンバ定義ナル者一モ存セザレバナリ。蓋シ商業政策論ノ發達ノ程度ハ今日ニ至ル迄デモ未ダ一個獨立ノ學術ト稱スルニ達セズト雖モ尙ホ原則ヲ抽象的ニ論ズルノ價值ヲキニアラズト信ズ。

世人或ハ今日ノ各國家ハ將來統一セラルノ時期アリト前提シ依テ以テ世界經濟統一主義ヲ説キ更ニ斬斷トシテ尙各國貿易政策ヲ研究セントスルハ殆ド至要ノ價值ナキモノタリト斷言スルモノアリト雖モ之實ニ空漠タル理想ヲ夢視スルモノト云フ可シ縱令一步ヲ讓リテ斯クノ如キ理想ハ過去ニ省ミテ將來必然ナル趨勢タリト證スルモ尙ホ甚ダ永遠ナルモノニシテ單ニ目下ヲノミ意トセザルヤ明カナリ。

抑吾人ノ研究スル要點ハ現在ノ問題ナリ現在ノ利害ナリ現在ノ政策ナリ蓋シ近世ノ國家思想ハ益々發達シテ列國皆帝國主義ヲ採リ政治上經濟上ノ利害關係ハ愈々急迫セル今日尙ホ遠キ將來ノ結果ヲ夢想シテ現在ノ政策研究ヲ輕視スルガ如キモノハ所謂 Utopia (ユートピヤ) ノ到來空シク希望セルニ過ギザルノミ是豈ニ吾人ノ一笑ヲ値スルニ足ランヤ之ヲ要スルニ國家ノ觀念ヲ基礎トシテ國際商業政策ノ研究ニ全力ヲ傾注スベキハ刻下ノ急務タルモノナリト信ズ。

第一章 外國商政ノ沿革

獨逸ライプナツヒ大學ノ教授ブユツヘル氏ハ人類經濟ノ發達期ヲ生産ト消費トノ距離ノ關係ヨリ觀テ大略三ツニ分テリ。即チ

第一孤立シタル家内經濟時代 (I The Stage of independent economy)

第二都府經濟時代 (II The stage of town economy)

第三國民經濟時代 (III The stage of national economy)

是也。人類ノ原始時代ニ於テ血統關係ヲ基礎トセル團體ニテ生活シタルモノハ、一個ノ家族ヲナシ、家族内ノ需要ハ專ラ家族内ノ生産ヲ以テ供給セラル、家族以外ノ未知人ハ、凡テ讐敵ニシテ爭鬪奪掠日モ亦足ラズ、他種族ヲ攻撃シ、又捕虜ヲ奴隸トシテ使役セリ。故ニ固有ナル商業ノ自然的狀態ハ奪掠主義 *spoils system* ト混淆セラレタルモノナルガ、此狀態ヨリ一步ヲ進メテ平和ノ手段ニ因リテ種族間ノ交換及ビ其媒介者ノ發生トナリ、外

商款待ノ事アリ。又種族間ノ交換ハ明示又暗示ノ合意ニ基キ、或種族ハ他ノ種族ヨリ特權ヲ得、又ハ商業居留地ヲ有スルニ至テハ、既ニ對外商政ノ萌芽ヲ見ルベク、此社會團體ノ著シキ發達ヲ遂ゲタリ。

* Bicher 氏著英譯 industrial Evolution 又ハ米 Ely 氏著 Evolution of industrial society P. 67

歐洲亞洲ノ人民ノ古代ニ於テ盛ニ商業ヲ營ミタルハフエニシヤ人、亞拉伯人、希臘、及羅馬人、等ニシテ、フエニシヤ人ハ航海ヲ主トシ、亞拉伯人ハ陸上隊商ニ依テ共ニ發働商業ヲ營ミタリ。次ニ航海ニ從事シタルハ希臘人ナリ。希臘政體ノ特色ニシテ經濟上ニ反應シタル最著シキモノハ、其都府ノ組織ニアリテ、都府經濟ノ發達シ、貨幣使用ノ盛ナルト共ニ雅典ニ於テハ、食料品ノ供給ヲ得ルノ必要上食料品輸出ヲ制限スルノ政策ヲ採リ、海賊ノ奪掠ニ對シ、外國ヨリ輸入スル穀物ヲ搭載スル船舶ヲ保護シ、又食料品ノ輸入ヲ確實ナラシムル爲ニ、其海港ニ發着スル船舶中、辰荷ヲ有セ

ザル船舶ニ對シテ貸金ヲ禁ズルノ法律ヲ布キタリ。而シテ雅典ノ盛時ニ於ケル、輸出入品ノ關稅其他ノ制度ヲ見レバ、其貿易政策ハ、一種ノ保護主義ナリシヤ明カナリ。

希臘ニ次テ世界商業ノ中心トナリタルハ、羅馬人ニシテ、ローマ人ハ武力ヲ以テ四隣ノ民族ヲ制服シ終ニ當時商業民族トシテ牛耳ヲ取りタルカーセ
―シテモ討滅シ、貿易ノ主權モ亦其手ニ移ルニ至リ、彼ハ戰勝ノ餘威ヲ以テ世界統一ノ大業ヲ完成スルニ及ビ、其領域ノ廣大ナルト道路ノ便利タルト政法ノ統一セルトニ依リ古來無比ノ大範圍内ニ、自由貿易區域ヲ顯出シタルヲ以テ、世界貿易ノ繁榮ハ其以後ト雖モ、十八世紀ニ及ブ迄比儔ヲ見ル能ハザルノ程度ニ達シタリ。

其後羅馬帝國ノ分裂スルニ及ビ、東羅馬帝國ハ歐亞貿易ノ仲介者タルノ職ヲ盡シ、貿易ヲ獎勵シタルコトナキニ非ザリシモ其獎勵ハ財政上ノ手段ニ過ギズシテ官吏ノ專横ハ貿易ノ健全ナル發達ヲ阻ゲタルガ故ニ、商業史上

重要ナル地位ヲ占ムル能ハザリキ反之地中海上ニ貿易ノ主權ヲ樹立シタル南歐伊太利市府ニシテ、就中ジエノア、ヴェニス、及ピサ等ハ、其最著ルシキモノナリ。

ヴェニスノ商業ハ、一時盛大ナ極メ而シテ其政策ハ、後來歐洲諸國ノ採リタル Mercantile System, 『マーカントイルシステム』ノ濫觴ト認メラルベキモノニシテ、ヴェニス人ノ營ミタル貿易ハ、東洋ノ貨物ヲ輸入シ、更ニ之ヲ歐洲各地ニ分布スルニアリシガ其政策ハ、中介貿易ヲ主眼トシタルノミナラズ工業ノ獎勵ニモ注意シ、原料品ノ輸入、及製造品ノ輸出ヲ容易ナラシメテ、後世政策ノ模範トナレリ。北歐ニ於テモ、文明ノ潮流ハ、自足的家族經濟ヨリ都府經濟ニ遷移シツツアリテ、中古終期ニ於ケルハンザ同盟ノ如キハ、同盟市府ノ結合力ニ依リテ商人ノ生命財産ノ安全ヲ圖リ、商業居留地ヲ建設シ、重稅ヲ免除セラルルノ特權ヲ得ルヲ目的トスルニアリシガ後ニハ強大ナル武力ヲ以テ政治上ノ大勢力ヲ得ルニ至レリ。是レ都府經

濟ノ實ヲ現シタルモノト云フ都府經濟ヨリ發達シテ、國民經濟ノ完成ニ移ル時期ニ於テ各經濟團體ガ商權ノ樹立上競争ノ手段トシテ採リタル政策ヲ總括シテ、『マーカンマイル』主義ノ政策ト稱ス。

『マーカンマイル』主義ハ、國民經濟ノ成立ヲ助ケタル者ニシテ其成立ニハ國家内部ノ統一ヲ必要トセシガ内部ノ統一ハ、各都府ノ特權ト兩立スル能ハズルヲ以テ、國民内部ニ於ケル交通、商業ノ制限ハ、漸チ以テ解放セラレ、佛ノユルベールハ、先ツ内國關稅ヲ撤去シテ、國民經濟ノ成立ノ障害ヲ除キタリ。然レトモ外部ニ對シテ國民ナル經濟團體ヲ以テ、競争ヲ試ムルヲ要スルガ故ニ制限的ノ政策ヲ取ルノ必要アリ、英ノクロンウエルノ航海條例ノ如キ、其著シキ者トス、其結果ハ内國商業ノ發達トナリ從來ノ都府經濟政策ハ一變シテ『マーカンマイル』主義政策トナリタリ。

此主義ノ政策ハ、第十六、十七、十八世紀ヲ通シテ行レタルモノニシテ、國民經濟ノ完成ヲ遂ケシガ、其内容ニ於テハ各國一樣ナラズ、佛國ノ干涉

政策ト、英國ノ箇人企業ヲ挫折セザリシ政策トハ異リ、他ノ諸國モ、亦多少ノ差異アリト雖モ、國民經濟ノ方向ヲ追テ進行スルハ、同一ニシテ、第十九世紀ノ初ニ及ンデ、始テ統一ノ大業ヲ成シタル國民モ少カラズ。斯クノ如ク各國民經濟ノ完成シタル後ト雖モ、人類經濟ノ發展ハ、一日モ其歩ヲ止メズ、更ニ孤立的國民經濟ヨリ世界的國民經濟トナリ、其相互ノ關係ハ、益々複雑トナリテ、終ニ現時ノ國際貿易ヲ現出スルニ至レリ。

元ヨリ『マーカントイルシステム』ニ於テ、當初ヨリ直ニ外國貿易ニ對シテ、制限ヲ加ヘタルニ非ズ、其貿易政策トシテ現ハレシハ先ツ金銀ノ輸出禁止ニ始マリ其レヨリ一步ヲ進メテ外國貿易ニ制限ヲ加フ、即チ、外國品ノ輸入ヲ禁止シ、國產ノ輸出ヲ獎勵スル等ノ干涉政策トナレリ是レ當時國勢ノ必要ニ基キテ、策竝ニ出タリト雖モ、其必要ノ去ルニ及ビテハ、自然ニ廢止セラルベキ勢アリ。蓋シ一度當時過渡期ノ適策モ長年月ヲ經テ事情ノ變遷シタル曉ニハ之ヲ應用スル事能ハザルモノニシテ大陸ニ於テ、佛ノ宰相

コルベールガ極端ニ此主義ノ政策ヲ採リシ結果ハ、適度ヲ超エテ國家權力ノ濫用トナリ、人民自然ノ發達ヲ阻止シ、其弊害甚シキニ至テ、學理上ニモ實際上ニモ反對ノ聲起リ、商業家モ、却テ干渉ノ苦痛ヲ感シ、營業ノ自由ヲ得ルコトヲ希望シ、農業者ト相率井テ自由貿易ノ說ヲ唱フル者漸ヤク多キニ至レリ。

此時ニ當リテ、一ノ學派トシテ實際上ノ利害ヲ代表セシモノハ、即チ佛王ルイ十四世ノ侍醫クエズネー其人ナリ。氏ハ自然法則、自由放任ノ說ヲ唱導シ、重商主義ヲ攻撃シテ重農主義 *Physiocrat System* ノ說ヲ樹立セリ、其後ルイ十六世ノ治世ニ於テ千七百七十四年乃至七十六年迄大藏大臣ノ職ニ在リタルケルゴーノ如キ、熱心ニフイデオクラツト派ノ學說ヲ實際ニ適用スルニ勉メ、之ガ爲メニ、多少佛蘭西ニ、貿易自由ノ曙光ヲ放ツニ至レリ。

次デ對岸ノ英吉利ニ於テ、有名ナルブダムスミスハ、經濟ノ基礎ヲ勞力ニ

置キ分業ノ利ヲ説キ私益心ノ作用ヲ論シ以テ産業ノ放任スベキヲ唱導シ、自由貿易ノ主義天賦ノ權利説ハ、益々其聲ヲ大ニセリ。爾後學者リカード等ノ如キハ、專ラ此主義ヲ敷衍シ、千八百四十九年ニ至リテ、英國ハビール、ユブデン、ブライト等政治家ノ力ヲ藉リ、全ク穀令 Corn Law ナ廢止シテ、自由貿易ノ主義ヲ實際ニ施行スルニ至レリ。

千八百六十年英佛兩國間ニ、自由通商條約締結セラレ、佛國モ之ヲ機トシテ總テ輸入禁止ノ規定ヲ解クト共ニ、石炭鐵ノ輸入税ヲ免除シ、六十二年普魯西ハ佛ト自由貿易主義ニ傾キタル條約ヲ結ビタルヲ以テ、獨逸聯邦ノ關稅同盟モ、亦自由貿易ノ旗色ヲ帶ビタリ。七十七年以後ニ、加工ノ鐵ノ輸入税ヲモ全ク廢止セルニ至レリ。

斯ノ如ク自由貿易ノ風潮ハ漸ク歐大陸諸國ニモ波及シ其趨勢ハ非常ニ強大テ加フルニ至リシモ久シカラズシテ一種ノ反動的商政トシテ保護干涉ヲ見ルニ至レリ。

現時ノ反動的商政ヲ生シタル原因ハ歐大陸ニテ國ニ依テ差異アリト雖モ要スルニ財政上ノ理由ト經濟上ノ變動トノ二ニ外ナラズ。

普佛戰役終リタル後佛國ニ於テハ五十億「フラン」ノ償金ヲ獨逸ニ支拂ハザル可ラズシテ、其財源ヲ關稅ニ求ムルハ、當然ノ勢ナリ。加フルニ保護稅論者タルナール財務ノ局ニ當リシヲ以テ、更ニ此勢ヲ増加シ、千八百七十五年西歐通商條約ノ影響ニ關スル調査委員會ヲ設ケ、八十一年ニ、久シク拋擲セル國定稅率ヲ改正シ、保護稅主義ニ傾キタリシガ、此傾向ハ、穀物及家畜ノ輸入稅ノ引上ニ依テ顯ハレタリ。

獨逸ニ於テ、普佛戰役ノ際ハ、自由貿易論者テルーリユツク政務ノ局ニ當リ、フランクフルト媾和條約、第十一條ニ、條約國雙方ハ、互ニ條約中ニ定ムル各國ニ與フル利益ヲ與フベキ事ヲ規定シタリ。其後數年間ハ商工業繁榮ノ時期トナリシモ、千八百七十五年乃至七十九年頃ニハ、全世界ニ於ケル不景氣ノ爲ニ、獨逸新興ノ工業ハ、外國ノ競爭ヲ受クルト烈シク保護稅

ノ必要ヲ説ク者増加シ、又交通方法ノ進步ハ、商政變遷ヲ促カシタル動機トナリ、大西洋上ノ航路ト、米國露國ニ於ケル鐵道ノ發達ハ、廉價ナル穀物ヲ歐洲ニ輸入スルヲ得セシメ、農業者ハ保護ヲ要求シ、農工業ハ相伴テ自由貿易策ノ廢棄ヲ迫ルニ至レリ。

佛獨ノ外、墺國モ千八百七十三年ノ恐慌以後、保護稅主義ニ傾キ、大ニ關稅率ヲ高メ、北米合衆國及其他ノ新大陸諸國モ、亦此主義ヲ採リ、千八百九十年頃、歐洲諸國間トノ通商條約滿期ニ達スル者多キニ及ンデ、殆ド其頂點ニ達シタリ。

翻テ英國最近ノ商政ヲ見ルニ之レ亦歐大陸反動的商政ノ行ハレシ以來ハ、一變兆ヲ呈セリ。抑モ十九世紀前半ニ於テ、穀物令ヲ撤去シ、航海條例ヲ廢止シタルノ政策ハ、スミス派學說ノ爲ニ動カサレタルニ非ズ、實ニ英國工業ノ發達シテ、其製造品ハ、外國市場ニ於テ優勢ヲ占ムルヲ得ルニ及ビ、自由貿易政策ヲ採用シタルモノニシテ、其結果、農業上ノ利害ハ第二位ニ

下り、穀物ノ輸入ヲ自由ナラシメ、工業ノ發達ヲ助長セシメタルニ過ギズ。然ルニ自國製造品ガ、外國工業ノ爲ニ、其販路ヲ縮小セラルルニ及ビ、再英國ニ於テ、自由貿易ニ反對スル論者ハ、増加ノ勢ヒヲ呈セリ。

自由貿易反對論者ノ説ハ、未ダ實際ノ政策トシテ顯ハレタルモノ甚ダ少シト雖モ、千八百八十七年ニ及ビ、商標條例 *Merchandise marks act* ニ依リ、英國輸入品ノ商標上ニ、原產地ヲ明記セシメ、獨逸品ノ輸入ヲ防ガントシ、九十七年監獄製作品條例 *Prisonmade goods act* ナ以テ、外國監獄製品ノ輸入ヲ禁止シ、又獸疫傳播ヲ防グノ目的ヲ以テ、家畜輸入ニ關スル法令ヲ發シ、之ニ依テ外國品競争ヲ阻止スルノ手段トナレリ。抑モ外國品競争ノ問題ノ注意スベキハ性質上他國ニ於ケルガ如ク内國市場ニ外國品ノ輸入ヲ防ガン爲ニ保護稅ヲ復舊スルノ必要ヲ認ムルモノニアラズ、主トシテ他國競争者ニ依リテ英國品ノ外國殊ニ殖民地ニ於ケル販路ヲ奪ハルルヲ防ガントスルニ在ルヲ以テ此問題ハ帝國主義ニ至ルベキ一徑路タルニ過キズシテ帝國主

義ニ依リ英本國ト殖民地ヲ合同シ更ニ一大經濟團體ヲ建設セントスルノ商政ハ外國競爭ノ問題ニ依リ端緒ヲ開キタルニ過ギズ。千八百八十年ニ起リタル公平貿易同盟 Fair Trade League ニ次デ該同盟主唱者ウインセントハ千八百九十一年ニ至リ合衆帝國貿易同盟 United Empire trade League ヲ組織シ殖民地ト母國ノ貿易上ノ關係ヲ親密ナラシムルノ必要ヲ主張セリ。此政策ノ實行ハ、千八百九十五年チエンバレーン氏ノ殖民大臣タルニ及ビ、其歩ヲ進メ、氏ハ千八百九十六年全國商業會議所聯合會、又翌年、殖民地首相會議ニ於テ、帝國關稅同盟ノ問題ニ就キ、討議スル所アリ、千九百二年ニ於ケル英皇戴冠式ニ際シテ、殖民地首相會議ハ、更ニ本國ト殖民地トノ間ニ、貿易上ノ關係ヲ密接ナラシムベキ方法ヲ討議シ、各殖民地ハ、差別關稅法ヲ以テ、英本國製造品ノ輸入稅ヲ獎勵スルノ必要ヲ認メタリ。上述ノ趨勢ニ於テ、最著シキ變動ヲ生ゼシハ、千九百二年英國議會ニ於テ、大藏大臣リツナー氏ガ、穀物輸入稅ヲ撤回セントスルニ當リ、有力ナル反

對論ヲ湧起セシメ也、即曩ニ英杜戰爭ノ爲、六十年前已ニ廢止シタル穀稅、千九百二年議會ニ於テ、歲入ノ不足補充ヲ名トシテ、容易ニ通過スル事、既ニ不可思議ナルニ、翌九百三年ニ、其財政大ニ裕ニナリ、戰時稅ノ撤去ニ付テ、先ツ穀稅ヲ以テ、下院ニ提出セシト雖モ、當時南阿視察ヨリ歸朝ノ殖民大臣ヲ氏ハ、保護論ノ領袖トシテ、穀稅ノ存續ヲ主唱シ、五月十五日、平生ノ大抱負ヲ發表シテ、政界ノ大波瀾ヲ捲起スルニ至レリ。

是元ヨリ氏ガ年來抱懷ノ帝國主義 Imperialism ノ理想ヨリ打算セシモノニシテ、保護主義ノ化身タルノ見アリ。彼ノ五月十五日夜ニ、其選舉區バーミンガムニ演說シテ、英國ガ六十年間國是トシテ採用シ來レル自由貿易ニ向テ、大打撃ヲ加ヘ、即チ諸外國ガ保護政策ニ由リテ、英國及英殖民地ヲ苦シムルヲ見、英國モ亦之ヲ防禦スル爲、母國ト殖民地ノ間ニ關稅同盟ヲ作り、特惠稅則ヲ定メテ、其競爭ニ當ラザル可ラズ、且英國今日ノ情勢ハコブデン時代ト大ニ其趣キヲ異ニス、米獨繁榮ノ基礎タルノ保護稅ニ對シテ、

報復手段ヲ取ラザル可カラズト述ベタリ。此時自由黨總理スベンサー氏、大藏大臣リケツケー氏等、大ニ特惠關稅ノ非ヲ鳴ラセシガ時ノ首相バルフォア氏ハ、ケ氏ノ政策ニ贊成シ、及加奈太、濠洲聯邦、新西蘭等ハ、何レモ右ノ新貿易政策ニ贊成シ、又保守的國民モ近來貿易政策ノ變更ノ機熟シツツアリシト見エ、氏ノ提議ヲ機トシテ、保護政策協會ヲ組織シ、二十五有力ナル製造業者、之ニ加盟シテ、氏ノ政策ヲシテ遂ニ着々其實行ヲ現ハサシムルニ至レリ。是他ナシ、ケ氏等ヲシテ保護政策ノ方針ニ向ハシメタル所以ハ蓋シ近來獨米諸國ノ商工業ガ、長足ノ進歩ヲ爲シタルヲ見テ、英國一般ノ人心ガ、漸ク商業上對外競争心ニ驅ラレタル結果、從來ノ貿易政策ニ向テ、疑ヲ措ク者増加シタルニ在リ。

上述セル保護政策ノ問題ハ、嘗ニ英國ノミナラズ、世界ノ貿易上重大ナル事件ニシテ、元來習慣ニ狃スル保守的英國人民ニ在リテハ、現時ノ貿易政策ヲ變更スルコト、容易ナラザルベシト雖モ、斯ル貿易問題ノ起ルニ至レル

ハ、自由保護兩政策ノ利害得失ヲ論スルニ當リテ、最注意スベキ事件ナリ。

第二章 外國貿易上ノ二大主義

外國貿易トハ國際間ノ貨物ノ交換、換言スレバ國ト云フ政治區域間ノ貿易ニシテ國家ハ各其地位ヲ確保シ、勢力ヲ占得スル事、政治上必要ナルガ故ニ各國相競フテ自國ノ經濟ヲ鞏固ニスルノ要アリ之レガ爲國家ハ其外國トノ貿易ニ制限ヲ加ヘテ自國ノ産業發達ヲ圖ラサル可ラズ、是レ干涉保護說ノ起ル所以ナリ、之ニ反シテ、個人行爲ノ自由ヲ重視スル學派ハ、以爲ラク凡ソ人類社會ニ於テハ、天然ノ理法アリ、此理法ハ、實ニ人生不易ノ標準トナルガ故ニ、若シ人之ニ背キテ働ク時ハ、勞シテ功ナキノ愚ニ陷ルノミナラズ、却テ損失ヲ招キ害毒ヲ流スナリ、是ヲ以テ故ラニ人定法ヲ設ケ、此天然ノ法ニ逆フハ不可ナリ。國際貿易ノ事モ、此理ニ依リ自然ニ放任スルノ優レタルニ如カズト、是ニ於テ所謂放任自由說ナルモノ發生シ來レリ此自由放任ト保護干涉トノ兩主義ハ汎ク經濟上各般ノ事項ニ關聯スルモノ

ナレドモ外國貿易上ニ於テ最モ議論ノ喧囂甚シキヲ觀ル。

第一節 自由保護兩貿易ノ意義及其趨勢

自由貿易トハ、外國トノ貿易ニ制限ヲ立テズ、人民ノ便利ニ任カセ勝手ニ通商セシムルヲ言ヒ、保護貿易トハ、外國ヨリ輸入スル物品ヘハ、殊更ニ重稅ヲ課シテ、其市價ヲ高メ、自由ニ輸入スルコトヲ防ギ、内國ノ資本家ナシテ外國ノ競争ヲ免カレシメ或ハ自國產物ノ外國市場ニ於ケル販路ヲ擴張スル爲メ之レヲ安價ニ供給セシメントシテ種々ノ方法ヲ施シ以テ内國產業ノ發達ヲ獎勵補助スルモノヲ言フ、而シテ此二者ニ就テハ學者中議論兩派ニ分レ、種々ノ論辯駁撃アルモノナリ。然リト雖事物ノ一方ニ偏スルハ不可ナルガ故ニ、其良キハ取り惡キハ捨テ、正ニ其中道ヲ行クベキナリ。夫レ最小ノ勞費ヲ以テ、最大ノ満足ヲ得ントスルハ經濟行爲ノ大方針ナリ、而シテ此方針ニ副ハントセバ、國民各其最モ適シタル才能ヲ以テ其國ニ最モ適シタル產業ニ從事シ、分業交易以テ他國ト有無相通シ、難易相補フニ如

クハナシ斯クスレバ人類ノ幸福實ニ大ナラザランヤ。然ルニ保護論者ノ言ノ如ク、外國物品ヲ自由ニ内國ニ入ルヲ防ギ、其自國ニ適當セザルモノモ、殊更ニ保護ヲ加フレバ、只ダ勞費多クシテ生産スル所少ク、徒ニ其物ノ市價ヲ高ムルノミニシテ、人々ノ満足多キヲ得ズ、想フニ諸國ノ風土相同シカラザルニ從ツテ物産モ亦一樣ナラズ、東ニ有リテ西ニ無ク、南ニ勞費少クシテ北ニ勞費多キモノアリヤ、知ルベシ、若シ貿易自由ナラズンバ、各特色ヲ異ニスル國ハ互ニ交易ノ長所ヲ盡スコト能ハズシテ、徒ラニ自然ノ利ヲ没却スルコトトナラン、ムシロ各國其適スル所ニ專從シ、以テ生産ノ盛大ナルヲ致スノ優レルニ如カズ。此點ヨリ見レバ、自由貿易論ハ勝利ヲ占ムルガ如シ。

然リト雖モ自由貿易モ、亦一概ニ可ナリトスルコト能ハズ、例ヘバ茲ニ一國アリ、毛布製造ノ業ニ適スルモノアリトセンニ、此國民未ダ其業ノ大利アルヲ知ラズシテ、之ヲ營ムモノナク、設使營業者アリトモ、未ダ其業ニ慣

レザルヲ以テ、外國ヨリ毛布ヲ輸入シ來リ、之ト競争スル能ハズ、從テ人敢テ此ノ業ヲ永續シテ、以テ新ニ利益ノ途ヲ開クニ至ラズ。此ノ如キ場合ニ當リ、政府其活眼ヲ開キテ、自國ニ適シ、將來外國ノ輸入品ヲ壓倒スルニ至ルベキヲ見込ミ、一時外國ヨリ輸入スル毛布へ、保護稅ヲ課シ、以テ自國ノ製造家ガ、最初事業ニ慣レタル間ノ競争ヲ防ギテ、其發達ヲ獎勵補助セバ、之ガ爲ニ毛布製造ノ業開ケ、遂ニ盛大ヲ致シテ、ヨク外國ト競争スルニ至ラン、此ノ如クニセバ、一時ノ保護ハ、後日永遠ニ利益ヲ得ル基トナルナリ。之レ保育保護ノ一例ナルガ其外衰頽セル產業ヲ挽回セント欲スルモ亦同理ニ、保護干涉ノ方法ヲ施行スルニ利アリ。又武器彈藥等ノ如キ兵事上ノ關係ヨリ自由貿易ニ一任ス可ラザルモノアリ、是等ノ場合ニ、自由貿易ヲ偏守スル時ハ、空シク天然ノ利ヲ埋没シ、事物ノ調和ヲ失シ、政治上ニ不都合ヲ生スルコト少ナカラザルベシ、此近世商業政策ノ保護ニ趨ク所以也。

第二節 自由保護兩貿易主義ノ分派

自由保護兩主義ノ起因タルヤ、畢竟自然理法ト人爲手段トノ分歧ヲ以テ、延テ個人主義ト國家主義トノ衝突ニシテ、前者ハ專ラ個人天賦ノ權利ヲ基礎トシテ、自由貿易ヲ唱へ、後者ハ重キテ國家若クハ國民多數ノ利害得失ニ置キ、貿易ノ保護ヲ制限セザル可ラザルヲ主張セルモノトス、然レモ此二説、何レモ種々ノ分派アリテ必スシモ同一ナルニ非ズ、此區別ヲ明瞭ニシ、且其利害得失ヲ比較研究セント欲セバ、更ニ分析シテ解説スルノ必要アリ。

第一款 自由貿易派

自由貿易ノ學派ハ、一切ノ經濟關係ニ、自然ノ成リ行キニ放任スルヲ以テ、最モ宜シトスト言フニアリト雖モ、其派別ハ、異同少ナカラザルヲ以テ、之ヲ分テ三トス。

一 絶對的自由派。『マンナユスター』學派 Manchester School ト稱セララルル一

ハ派ノ主唱者ハバスターア氏ニシテ、之ヲ實行スルモノハコブテン、ブライト二氏ノ如キ如何ナル場合ニ於テモ、放任主義ヲ採リ、全ク世界ノ競争ニ任シ、宇内各國ヲシテ一經濟團體ニ歸セシメントスルニアリテ、國家ノ力ヲ藉ラザレバ、發達シ難キ産業ハ、一國ニ不利ナル事業ナレバ、其ノ自カラ倒ル、ニ任シ、敢テ保護ヲ加フルノ必要ナシト。然ルニ現今ノ如ク各國トモ、自國ノ繁榮ヲ増殖スルニ努メ、相互ニ競争スル場合ニ於テ、到底行ハレザルノ説ナリ。

二 制限的自由派 アダムスミス及ミル氏ノ如キハ、專ラ自由貿易ノ利益ヲ主張スル者ナレトモ、例外トシテ保護政策ノ決シテ無用ニ非ラザルヲ説ケリ、其一國防上必要ナル場合、其二外國輸入品ノ負擔ヲ内地課税ト均シカラシムルガ如キ場合ニ於テ、保護ヲ爲スベキヲ可トセリ。之ヲ前者ト比スレバ、其説稍々穩當ナルヲ見ル。

三 相互主義派 此派ハ固ヨリ自由貿易ヲ爲サント欲スレトモ、外國ニ於

テモ、我物産ノ輸出ニ對シテ制限スルトキハ、我國ニ於テモ、外國ヨリノ輸入品ニ對シ、均シク制限ヲ加フルノ方法ニシテ、固ヨリ外國ヲシテ其制限ヲ解カシルムノ見込アルトキニ、報復的ニ實行スルモノナレバ、相手國ノ制限ヲ廢スルトキハ、我ニ於テモ其ノ制限ヲ解キ、以テ自由貿易ヲラシムルニアレバ、要スルニ一時臨機ノ政策トシテ行フモノト謂フ可シ。

第二款 保護貿易派

保護貿易學派ノ主張スル所ヲ見ルニ、多クハ絕對的ニ保護政策ヲ行ハントスルニ非ズ、一ノ方便計時宜策トシテ其必要ヲ説クガ如シ、干涉保護政略ヲ以テ有名ナルコルベールスラ、之ヲ以テ一時苟且ノ策トシ、保護稅ハ一種ノ杖ニシテ、製造家ハ依テ歩行スルコトヲ習ヒ、而シテ後チ拋棄スルモノナリト（井上辰九郎著外國貿易二八九頁參考）云ヘリ。近世ノ學者リストロツシユルノ如キ、皆邦國ノ産業發達上ノ程度ヲ鑑ミテ、適當ナル保護ヲ

施行スベシト論セリ。其派別モ亦種々アリ。

一 保護ノ目的物ヲ標準トスル時ハ、或ハ工業ヲ獎勵スル爲ニ保護ス可シト論スルモノアリ、或ハ商業農業若クハ航海業ノ保護ヲ主張スルモノアリ。

二 保護ノ方法ヲ根據トスル時ハ、輸入品ノミニ課税スベシトスル論者アリ或ハ輸出獎勵金主義ヲ取ルモノアリ、或ハ助成金制度ヲ採ルモノアリ或ハ輸出税全廢論ヲ唱フル者アリ、原料品ノ輸入ニハ課税セザルモ、精製ノ輸入ニハ、禁止税ヲ課スベシト論ズル學者アリ。

三 保護ノ方針ニヨリ分ツ時ハ、通商主義、互惠主義、復讐主義、教育關稅主義、合同保護主義、緊急保護主義等ノ別アリ。

四 保護ノ時期ヲ本トスル時ハ、一時主義ト、永久主義トノ區別アリ。前者ハ、自國産業ノ幼稚ナルガ爲メニ已ニ發達セル他國産業ノ如ク低廉ニ貨物ヲ供給スルコト能ハザレバ、一時相當ノ保護ヲ加ヘテ、外國品ノ競

争ヲ避ケシメ、以テ其完全ヲ告ゲタル後ニ待テ、其保護ヲ解キ、之ヲ自由ニセザル可カラズ、恰モ子供ヲ養育スルト同ジク獨立シテ角逐場裏ニ立テ得ルマデ、充分ニ監督獎勵ヲ爲スガ如シ。後者ハ永久ニ此主義ヲ保存セントスルヲ主トシ、却テ興業殖産上ニ於ケル不利益ヲ起サシメ、結局國民ニ大ナル損害ヲ蒙ラシムル弊アルヲ願ミザルモノナリ。

以上述ヘル所ヲ見ルニ、同一ノ派ニ於テスラ、議論紛紜統一スル所ナシ況ヤ自由保護ノ二大派タル、元來互ニ正反對ノ地位ニ立テ、冰炭相容レザルモノナルニ於ケルヲヤ、古來ノ學者政治家、各城壁ヲ設ケ、旗幟ヲ樹テテ、議論ヲ鬪ハシ紛紛トシテ亂麻菅ナラザルノ觀ヲ呈スルモノハ、毫モ怪ムニ足ラザルナリ。

第二章 自由貿易論者ノ主張點

自由貿易論ノ根本ノ思想タルヤ、人類ハ利己心ノ作用ニ依リ、天然ノ理法ニ從ヒテ、自由ニ勞働スベク、其勞働ノ成果タル生産物ハ、之ヲ自由ニ交易セシムベク、人定法ヲ設ケテ其行爲ヲ拘束スルハ不可ナリ。蓋シ國民ヲシテ充分ニ其適スル業務ヲ專ラニシ、競争上ニ交換賣買ヲ自由ナラシムルハ、實ニ人民ノ幸福ノ爲、最善良ノ方法ナリト云フニアリ。要スルニ此議論タルヤ、主トシテ分業及ビ競争ノ利益、併ニ個人ノ權利等ヲ根據トスル者ナリ、以下此等ノ論點ヲ叙述スベシ。

第一節 自由貿易ハ分業ノ理ヲ完全ニスル利益アリ

凡ソ人類ハ、其衣食住ヲ初メトシ種々ノ欲望ヲ充足スル爲メニ、必要ナル諸般物件ノ豊富ナラン事ヲ求メ之レガ欠乏ヲ嫌忌スルハ、自然ノ性情ニシテ人ハ此目的ノ爲メニ適當ナル道ヲ求ムルヲ常トス。而シテ人各長短アリ

能不能アレバ其才能ニ應ジテ其短處ヲ捨テテ其長處ヲ經營スレバ、事半功倍ノ利アルノミナラズ、有餘ヲ以テ不足ヲオギナヒ、各個人其欲スル所ヲ遂グル事ヲ得、即個人間ニ於ケル交換ハ、分業ト相離ル可カラサル關係ヲ有シ、雙方共ニ生産力ヲ増進スルノ原因タリ、此事實ハ個人間ニ適用シ得ルト、同ジク國際間ノ關係ニモ亦適用セラルベク、外國自由貿易ニ依テ市場ヲ擴張スルハ、要スルニ國際間ニ分業ノ利ヲ舉グルノ最良手段タルヲ得ベシ。思フニ各國ガ有スル天與ノ富源ハ其性質、實體、配置、ニ於テ互ニ同一ナルヲ得ズ、氣候、風土、地床、河海、鑛山ノ地位、品質、土地ノ肥瘠等、各國間ニ相違スル所大ナルハ勿論、資本ノ供給、勞力ノ多寡、技術手藝ノ適否等、人爲ニ關スル點ニ於テハ更ニ相違ノ著シキヲ免カレズ、茲ニ於テカ、歐洲寒帶諸國ハ、茶珈琲ノ如キ飲料品ノ供給ヲ熱帶殖民地ニ仰グト、同時ニ熱帶殖民地ハ工業上需要スル所ノ石炭鐵ノ供給ニ乏シクシテ工業ヲ起スノ望ミナキヲ以テ、勢ヒ歐洲諸國ヨリ製造品ノ供給ヲ受ケ、其

結果、雙方共ニ自國ノ領土内ニ生産スル能ハサル貨物ヲ、消費ノ用ニ供スルヲ得ルナリ。

然ルニ自由貿易ノ目的物ハ、單ニ國土内ニ産出スル能ハザルノ貨物ノミヲ得ルニ止マラズ、天然ノ富源ノ分賦利己心ノ作用ヨリ、或貨物ニ就テ二國ノ生産條件異ナルトキハ、二國ハ互ニ他國ニ對シテ、條件優越スル貨物ノ生産ニ從事シ、其結果トシテ、最モ有利ニ相交換シ、以テ貿易ヲ擴大ナラシメ、從テ各國專ラ比較的生産費少キ産物ニ從事シ、自由ニ之ヲ市場ニ出シ、以テ國際分業ノ利ヲ獲ベキナリ。抑モ國際的分業トハ例ヘバ甲國ハ主トシテ粗生品ノ生産ニ從事シ、乙國ハ主トシテ製造業又ハ商業ニ從事スルガ如キヲ云ヒ、現今英國ハ商工業國トシテ現ハレ、佛國及伊國ハ美術國トシテ鳴リ、米利堅濠太利ハ農業國トシテ著キガ如キハ、其適例ナリ。ラヴェレー氏ハ曰ク、自由貿易ハ、分業ノ利ヲ全國民ニ適用スルガ爲ニ、其利益ヲ全カラシメ、大ニ國民ノ繁榮ヲ増加スベシト、(ラヴェレー經濟學ニ

三頁) フォーセツト氏ハ曰ク。一國內各地方ノ人民ハ、其地方ノ產物ヲ以テ、他ノ地方ノ產物ト、自由ニ交易スレバ、二ノ利益ヲ得、即第一若シ然カセスンバ、到底之ヲ得ル能ハザル所ノ種々ノ物品ヲ、此ノ方法ニ由リテ以テ獲得スルヲ得ベシ、第二、其一地方自身ニ於テ產出スルヨリハ、遙ニ低廉ナル價ヲ以テ、諸種ノ物品ヲ得ベシト(フォルセツト經濟學四八頁)要スルニ、此等諸家ノ説タル凡ソ分業ハ個人ノ間ニモ、國家ノ間ニモ、其利益極メテ大ニシテ、特ニ物品ヲ良質ニシ、且ツ之ヲ廉價ナラシムルノ一元素ナリ、蓋シ分業盛ナレバ生産ノ費用從テ減シ、生産費減スレバ、物品ノ價格從テ低落セザルヲ得ズ、分業ノ利斯ノ如シ、而シテ此有利ナル分業ヲ國際間ニ行ハシメント欲セバ、須ク輸出入ニ關スル制限稅ノ如キ障害物ヲ撤去セザル可ラズシテ、外國貿易ヲ無制限ニナシ之ヲ自由ニ一任スベシト云フニ在リ、是レ實ニ自由貿易論者ノ一ノ主張點ナリ。

第二節 自由貿易ハ個人天賦ノ權利ヲ保存ス

自由貿易ヲ主張スル論者ニ天賦ノ權利論者ト名ケラルベキモノアリ其論ノ根本ハ人類ハ其生産物ヲ交換スル天賦ノ權利ヲ有スルモノナリ然ルニ總テノ保護的海關稅ハ此天賦ノ權利ヲ侵害スルモノナリト云フニアリ。此權利論ヲ實利ト云フ考想上ヨリ援助スル學派ハ貿易上ノ束縛ハ天賦ノ自由ヲ侵害スルガ故ニ不正ノモノナリ又其不正ナルガ如ク不得策ナリト主張セリバ、ステール氏ハ、之レヲ抽象上ノ權利論ト便宜上ノ權利論トニ分チ、前者ハ佛國經濟學者バステア氏ヲ以テ、主張者トシ後者ハアダム・スミス氏ヲ以テ代表者ナリトセリ。バステア氏以爲ラク白耳義產鐵ノ輸入ニ對シテ、海關稅ヲ徵集スル所ノ佛國關稅局ハ、其運搬ノ途中ニ於テ、鐵ノ一部分ヲ掠奪スルノ盜賊ト、毫モ異ナルナシ、何トナレバ、其所有主ノ權利ヲ侵害スルヤ一ナレバナリト彼等ハ保護政策ハ、如何ナル方法ヲ以テスルヲ問ハズ、惟一種ノ新盜法タルニ過ギズト。(バステール原著田島錦治譯外ヲ侵國貿易論一七二、一七三頁參照)斯ノ如ク權利論者ハ國家ノ干涉ハ天賦ノ權

ヲ侵害スルモノト説キ、之ヲ極論シテ國家ガ若シ財産ノ交換ヲ全ク禁止シタル場合ハ人ハ孤立ノ生活ヲナサザルベカラズトシ、若シ人々孤立シテ生活シ、其外國民ト相提携スルノ利益ヲ剝奪セララルル片ハ、啻ニ文明ヲ進歩發達セシムル能ハザルノミナラズ、畢竟社會ヲシテ野蠻ノ域ニ復サシメ、人民ヲシテ奴隸ノ慘境ニ沈マシムルニ至ルベシ、即チ他人ノ爲束縛セララルル奴隸ハ、世界上ニ獨立生存スル能ハザルヲ以テ、奴隸廢止ヲ唱道セラレシ以來、今日ニ於テハ法律上道德上已ニ此制度ヲ有スルヲ認メズ、然ルニ文明進化ノ今日、忽チ財産ノ交換ヲ全ク禁止セララルルハ、恰モ奴隸主義ヲ今日ニ復施スルコトト擇ブ所ナク、必ズ行ハル可ラザルノ事ナリト主張セリ。

夫個人ハ一身ノ幸福ヲ全ク享有セント欲セバ、充分ノ自由ヲ有セザル可ラズ、去レバ個人ハ自分ノ有セル財産ヲ自由ニ使用シ得ベキ固ヨリ必要ナリ而シテ其財産ヲ自由ニ使用スルニ當リテハ、成ル可ク少ク費シテ多クヲ受ケルヲ願フハ、當然ノ事ナリ。故ニ賣ル場合ニハ、最モ高價ナル市場ニテ

賣ラント欲シ、買フ場合ニハ、最モ廉價ナル市場ニテ買フコトヲ望ム、然ルニ自由貿易ヲ許サザル片ハ、高價ナル市場ニ賣ラシメズ、廉價ナル市場ニ買ハシメズ、是レ個人ノ自由ニ交易スル利益ヲ侵害スルモノナリ。故ニ今個人財産上ノ最モ高尙ナル權利ヲ完全ニ保有セシメント欲セバ、其内國貿易タルト、外國貿易タルトヲ問ハズ、之ヲ自由ニナサシメザル可ラズ。是自由貿易論者ハ、自由貿易ヲ以テ個人ノ權利ヲ保全スルガ爲唯一ノ政策ナリト主張スル所以ナリ。

第三節 自由貿易ハ競争ヲシテ充分其勢力ヲ逞フセ

シムルガ故ニ産業ヲ發達進歩セシム

モンテスキュー曰ク、貨物ノ正當ナル市價ヲ定ムルハ、競争ニ在リト、實ニ至言ト云フ可シ。自國品ニ對シ、適宜ノ外國競争品アルハ、自國生産者ヲシテ或ハ不當ノ高價ヲ貪リ、或ハ小成ニ安ゼザラシメ、其商敵ノ爲、刺激セラレシガ故ニ、該品生産事業ハ、益々進歩發達スルニ至ルノミナラズ、

延テ一國ノ獨立的企業心ハ、益々向上開展スルヤ明瞭ナリ。夫レ産業ニ對スル競争ノ効能タルヤ、大ナリ、凡テ殖産ノ業ニ從事スル者ハ、其同業者ニ勝チ得ントスル念ニ鼓舞セラレ、如何ニシテ資本ヲ節用シ、如何ニシテ製造法ヲ改良シ、精美ノ貨物ヲ廉價ニ造リ出ステ得ルヤ、或ハ勞力ヲ減スルヲ得ベキ機械ヲ發明シ、或ハ製品品質ヲ變化スル化學的作用ヲ發見シ、或ハ大仕掛ノ分業ノ法ヲ採リテ勞力時間ヲ省キ、或ハ生産物ヲ迅速ニ配達スル方法ヲ案出スル等、其他種々ノ改良ハ、皆ナ自由競争ノ結果ナリ。十八、十九兩世紀ニ英米其他諸國ニテ、成就セラレタル科學應用ノ新發明ガ發明國ノ獨占ヲ許サズシテ、他國ノ競争ヲ促進セシ跡ハ、歷々トシテ蔽フベカラズ、蓋シ一種ノ工業ガ、舊時ノ如ク專ラ遺傳的ニノミ依頼スル時代ニハ、他國ハ甘ンジテ其物品ノ供給ヲ一定ノ國ニ仰グト雖モ、一朝機械ノ發明ニヨリテ、手足ノ熟練ガ、其効力ヲ失フニ至レバ、他ノ諸國ハ、皆爭テ自ラ其原料ヲ求メ、自ラ其機械ヲ調ベテ、自ラ其市場ヲ満足セシメント

勉ムルハ、自然ノ趨勢ナリ。故ニ競争存在スル片ハ、善良ノ物品ハ、絶エズ市場ニ出デテ、消費者ノ需要ヲ充分ニ充スニ、最大ナル利益アルノミナラズ、生産者ニ對シテモ、獨立心ヲ養成スル無形ノ利益ヲ與フルモノナリ。若シ夫レ競争ニシテ一朝生産界ニ跡ヲ絶タン乎、農工商ノ諸業ハ、忽テ活動力ヲ失ヒ、進歩ハ遂ニ停止スルニ至ラン、之單ニ産業方面ニ見ルニ止マラズ、社會全般ニ於テ免ル可ラザルノ通則ナレバナリ。細カニ現今經濟社會ノ状態ヲ察スルニ、自由競争ニヨリテ、學術工藝ハ、漸次ニ發達シ、生産法改良セラレ、少額ノ費用ヲ以テ、多數ノ貨物ヲ得、産業上ノ活氣ヲ増加シタルノミナラズ、外國ニ對シテ、優勝ノ地位ヲ占ムニ至ルモ、亦之レガ賜ナリ即チ外國貿易ニ關シテ、無制限ナル競争ヲ爲サシメ、自他ノ輸入チ自由ニシ、若シ外國品ニシテ自國品ヨリ廉價ニシテ良質ナラバ、大ニ之ヲ輸入セシムルヲ得策トス。要スルニ競争ノ度、愈々激烈ナレバ、人々角逐場裏ニ立チ、生産品ノ改良ヲ圖リテ、自由ニ之ヲ賣買セント欲ス。保

護税ノ如キ障害物ハ、須臾モ存在セシムル可ラズ、無制限ナル競争ヲ自他國民ノ間ニ行ヒ以テ産業ノ發達ヲ圖ラザル可カラズ。

第四章 自由貿易ニ對スル反對論點

第一節 幼稚ナル産業ヲ放任スルハ自然物ヲ損傷ス

ルト異ナリナキガ故ニ不可ナリ

小兒ト壯者トガ、力ヲ角スル事アラバ、小兒ハ常ニ負クルガ如ク、産業幼稚ナル國ト、産業發達セル國ト、貿易上ニ爭ヘバ、必ズ前者倒レテ後者勝ツ、故ニ産業幼稚ナル國ヲシテ發達成長セシメント欲セバ、所謂教育的保護制度ヲ施サザルベカラズ、獨逸ロツシエル氏ハ工業保護ノ教育論ヲ唱フルモノナリ、其說ニ曰ク、一國已ニ政治上獨立ノ體面ヲ具フルモ、經濟上尙幼稚ナル程度ニ在ル片ハ、先ツ經濟社會進歩シタル國ト接觸シテ、其長所ヲ自國ニ收ムルハ、經濟上ニ得策タル可シ、隨テ自由貿易主義ヲ採リ、外部ノ刺激ヲ受ケ、先進國ノ文明ヲ輸入スト雖モ、少シク國內ニ製造業ノ萌芽ヲ發シ、漸ク發達ノ域ニ進ムノ徵候ヲ現ハシタル片ニハ、商業政策ヲ利

用シ、外國競争ニ對シテ自國工業ヲ保護スルノ必要アリ。蓋シ工業ヲ經營スルニ當リ、豊富ナル資金、精良ナル機械的技術、經驗熟練アル勞力ヲ有スル國ハ、今後斯業ヲ企圖セントシ、或ハ企圖シツツアル國ニ對シ、優勝ノ地位ヲ占ムルノ常ナレバ、其產出セル所ノ貨物ハ、新興國ノ製造品ヨリモ、低廉ノ市價ヲ以テ之ヲ世界ニ供給シテ新興國ノ發達ヲ妨害スルノ結果ヲ來ス可シ、故ニ新興國ニ於テハ舊開國ニ對シテ、對等獨立ノ地歩ヲ占ムル能ハザル限り、國內ニ工業ヲ起ス能ハザルコトトナルヲ以テ、斯ル發達ヲ告グルマデ、輸入税ニ依テ、外國工業品ノ輸入ヲ防遏スルハ、國內ノ工業ヲ安全ニ發達セシムルノ手段トシテ止ムヲ得ザルナリト、即チ内國産業ノ幼稚ニシテ外國同種ノ事業ニ對シ、競争スル能ハザル間ハ之ヲ養成スルル目的ヨリ輸入税ヲ課シテ、以テ外國品ノ輸入ヲ制限シ、内國ノ市場ヲ確保シ、防護ヲ加ヘザル國ノ産業ヨリモ、利益アル地位ニ立タシメ、消費者ノ使用スル製造品ヲシテ、内國農產物ノ輸出ニ依ラシメズシテ、内國ニ於

ケル生産ニ依ラシメ、企業家ヲ安全ニシテ自國産業ノ發達ヲ期セザル可ラズ。

之ヲ個人ノ實際ニ就テ觀ルニ、其未ダ丁年ニ達セズシテ、獨立自治ノ能力ヲ備ヘザル片ハ、家長ハ之ニ生計ノ資ヲ給シテ、他日ノ成長ヲ期スル事アルヲ以テ、之ヲ直ニ一國ノ經濟ニ適用シ、幼稚ナル産業ニハ、一時相當ノ保護ヲ加ヘ、以テ他日ノ發達ヲ促サントスルハ、自ラ其間ニ多少ノ理由ヲ備フルヤニ想像セラル可シ、隨テ幼稚ナル事業ニ對シ、其創始ノ時ヲ限テ干涉ヲ加フルノ政策ハ、各國ニ於テ頻リニ行ハル、若シ夫レ未ダ工業ノ基礎鞏固ナラザルニ當テ、之ヲ自然ノ成長ニ放任スレバ、自國ノ産業、將ニ外國輸入品ノ爲壓倒セラレ、非常ノ損失ヲ蒙レルノミナラズ、自國ノ産業ハ原料品ノ輸出ノ外、徴々トシテ振ハズ、一方ニ於テ既成ノ産業ハ他國同様ノ産業ニ凌駕セラレテ、完全ナル發達ヲ遂グル能ハザルト同時ニ未成ノ事業ハ遂ニ勃興スルノ期ヲク天與ノ豊富ナル財源モ開發セラレズシテ徒ニ

拋棄セラルルノ害一層大ナルモノアリ。

第二節 自由貿易ハ個人ニ利アリテ必スシモ社會ニ

利アラザルガ故ニ其所謂權利論ハ薄弱ナリ

個人ハ天賦ノ權ヲ有スルガ故ニ、立法ヲ以テ之レヲ羈束スルハ、不可ナリト云フノ説ハ、已ニ陳腐ニ屬ス、蓋シ個人ノ權利ハ、國家ノ保護ニヨリ其全キヲ得ルモルニシテ、國家ハ個人ノ權利ヲ保護スル爲メニ、其目的ヲ曲グベキニアラズシテ目的ヲ達センガ爲メニ、個人ノ權利ヲ保護スルモノナリ、而シテ國家ノ目的ハ公共ノ秩序ヲ維持シ、全般ノ幸福ヲ増進スルニアルヲ以テ、個人ノ行爲ニシテ之レニ反スルモノアルトキハ、國家ハ之レニ多少ノ干涉制限ヲ加フルハ、當然ノ事ノミ、去レバ個人ハ其財産ヲ自由ニ處分スルノ權利ヲ有スレドモ、其行使ニシテ國家ノ利益ヲ侵害シ、社會ノ福祉ヲ損傷スル場合ハ、政府ガ之レニ干涉スルハ、決シテ條理ニ反スベキモノニアラズ。然ルニ自由貿易論者ハ、曰ク自由貿易ハ賣買ヲ自由ナラシムルガ故ニ、財産上

個人ノ權利ヲ全フシ、保護策ハ之レヲ侵害スト。固ヨリ賣買ハ之ヲ自由ナラシムベシ、而シテ貿易ヲ自由ナラシムルハ、賣買ヲ自由ナラシムルモノナリト雖、個人ガ其財産ヲ好ム處ニ就テ、賣買ノ用ニ供スルコトハ、必ズシモ國家ヲ富強ナラシムル所以ニアラズシテ、私人ノ兎角目前ノ利益、少クトモ性質上國家百年ノ長計ト相副ハザルノ利益ヲ目途トスルノ結果ハ、往々ニシテ國民全般ノ困厄ヲ來シ、其資金ヲ消耗シ其收入ヲ減却シ、其權威ヲ損傷シ其信用ヲ毀失シテ、遂ニ國家ノ存立ヲ全フスルコト能ハザルナキヲ保セズ、此ノ如キ場合ニ於テ、何ソソ個人ヲシテ賣買ノ自由ヲ專ラニセシムルヲ得ンヤ、果シテ然ラバ自由貿易ハ、縱令各人ノ財産權ヲ全カラシムルモノアルトモ、國民全體ノ利益ヲ害スルコトアルニ於テハ、之レヲ採用スベカラザルヤ明ナリ、然ルニ個人ノ私利ヲ偏重シテ國家社會ノ公益ヲ顧ミサルガ如キハ、個人主義ノ短見ニシテ取ルニ足ラサルノ論ナリ、若シ夫レ個人ノ利益ノ爲メニハ國家ノ滅亡ヲモ顧ミズト云フモノナリセバ國家ノ政策ヲ共ニ談ズ

ルノ資格ナキモノナリ。故ニ苟モ國產ノ豐富ヲ致スル爲、保護策ニシテ利益アラバ、縱令幾分カ個人ノ權利ヲ犧牲スルアルモ、敢テ之ヲ執行スルニ妨ゲナキナリ。

第三節 自由貿易論者ハ國家的觀念ヲ欠ク

各國ノ地理歴史ハ、其狀態同カラズ、農業地理ニ適スルモノアリ、或ハ商工業地理ニ適スルモノアリ、或ハ農工業時代ニ在リ、或商工業時代ニ在ルニ從ヒテ、自由貿易ヲ探ルト、保護貿易ヲ探ルトノ別アルハ自然ノ勢ナリ。然ルニ自由貿易派ノ説ヲ觀ルニ、各國成立ノ要素ヲ顧ミズシテ、世界萬邦ヲ、一大共和國トシテ立論スルモノナリ、ケエネー、バスターア、及ビセー等ノ如キハ、皆人類社會ノ全體ニ通シ、其講究ヲ試ムルモノニシテ、立國ノ要素上ニ顧慮スル所非ラザルナリ、又スミスモ其著述ノ富國論ニ於テハ、各別國民ノ差異ニ就テ論ズルニ非スシテ、人類全體ノ國民ノ性質及原因ニ就テ論シタリ、即チ彼等ノ理想ハ、各別ノ諸國商人ヲ聯合セント欲シ、

以テ一ノ統一的世界經濟政策ヲ行ヒ、通商ノ境界ヲ撤去セシメントセリ、而シテ其所謂經濟學ハ、世界的經濟ニシテ、決シテ國家的經濟ニアラズ。夫レ國民經濟時代ニ在テ、歷史ヲ案セズ、國情ヲ照ラサス、漫ニ世界政策ヲ行ハント欲セバ、夏裘ニシテ冬葛ト異ナルヲキガ故ニ、吾人ハ今日ノ經濟社會ニ於テハ、各國獨立シテ自己ノ利益ヲ保持シ、互ニ智巧ヲ鬪ハシ以テ通商上ノ勝負ヲ決スルヲ觀テ、茲ニ國家的經濟學上發達セシムル必要アルヲ知ル、况ンヤ外國貿易ハ各國間ノ差異ニ基クモノナルニ於テチャ、詳言セバ、外國貿易存立ノ要件ハ第一ハ、各國ノ地味氣候水利等ノ自然的差異ニシテ、第二ハ各國國民ノ技術才能勞力資本等ノ人爲的差異ナリト云フベシ、今假ニ產業ノ發達セシ彼我殆下同程度ノ地位ニ立シタル邦國アランカ、天與ノ產ト、人爲ノ力トハ、悉ク優劣ナケレバ、個人ノ自由競争ニ任シテ、大ニ相互ノ利益ヲ致スベシト雖モ、一國經濟ノ發達上、經過スベキ歴史の順序同カラズ、國家ノ地球上ニ於ケル位置モ亦異ニシテ、溫帶地ノ

製造ニ適シタルト、熱帶地ノ農産ニ利アルトノ差異アル結果ハ、從テ外國貿易上ニテ採用スル所ノ政策モ、亦列國ノ情勢ニ因リテ各異ナルベキガ故ニ、自由貿易論ノ空シク假想ノ如ク世界一般ノ人民ノ利益ノ爲ヨリモ、寧ロ自國民ノ利益ヲ計ルノ優レルニ若カズ。宜ナル哉。獨逸保護學派リスト氏ハ國家思想ヲ彼ノ腦裏ニ浮ヘテ以テ、其著書ノ表題ノ如ク國家ヲ中心トシテ、經濟政策ヲ立テ、世界的經濟ニ對スルニ國家的經濟ノ發達ヲ目的トシタリ。即チ個人ニシテ全世界ニ於ケル生産ノ發達ヲ企圖スルモノナランニハ、自由貿易ハ其最良ノ方法タル可クモ、一國ニ於ケル生産ノ事業ガ時ニ、其國ニ於ケル個人ノ利益ヲ傷クル事アルト同ク全世界ニ於ケル生産ノ事業モ、亦一國ノ利益ニ牴觸スルヲナキヲ得ザレバ、一國ノ生存上、又國民永遠ノ利益ノ爲、其國家的觀念ヨリ生ズル對外政策ハ、國際分業ヲ絕對的ニ擴張ノ不可ナルヲ認メ、其結果國家ハ或場合ニ於テ、外國ニ仰クヨリ遙ニ不廉ナル物品ト雖モ、自ラ其產出ニ從事セザル可ラズ、換言セバ國防上自己ノ短

所トスル産業ニモ、敢テ之ニ從事スルヲ妨ゲズ。リスト、ロツシエル、ノ如キハ國家ノ立場ヨリ保護ノ必要ナルヲ認メタリ勿論、自由派リカード、マルサス、バスタープル等モ、一般ノ貿易通則ニ向テ、例外ノ存在スルヲ主唱セリ、顧フニ前者ハ相對的ノ國情ニ據ルモノニシテ、後者ハ絕對的ノ哲理ヲ全フセルモノナリ、彼ノ從來普通ノ經濟學者ノ如キハ、單ニ純理ヲ研究スルニ急ナルニヨリ、相手方關係ヲ忘レタルモノニシテ、宇内ノ大法ナリト思惟シタルハ、實ニ國家的觀念ノ重ンスベキヲ知ラサルノ誤ニ坐スルモノト云フベシ。

第五章 保護貿易論者ノ主張點

保護貿易主義ハ、今ヤ全世界貿易上ノ大勢タラントスル傾キアリテ、歐大陸諸國ヲ始メ、北米合衆國等ガ、此主義ヨリ打算シテ施行セシ政策ハ、漸ク盛大ナ致シ最近ニ及ンテハ、六十年來自由貿易國トシテ有名ナル英國ニ於テスラモ、將ニ變更ノ方針ヲ執ラントスルニ至レリト雖モ、此主義此政策、必スシモ絶對的善美完全ナリト云フベカラス、予ガ前章ニ於テ述ベタル自由貿易論ト同シク、長短得失アリ、試ミニ以下節ヲ分テ、先ツ保護貿易論者ノ主張トスル所ヲ說キ、次ニ反對論者ガ缺點トシテ非難スル所ノ要領ヲ述ベン。

第一節 保護貿易ハ其國ノ産業ヲ發達セシメ經濟上

及政治上ニ於テ國民ノ利益ヲ増進ス

國ニ遊民ナケレバ、生産者衆ストハ、支那先哲ノ格言ナリ、一國內ノ人民

ナシテ、生産社會ニ立テ、各其職業ヲ盡シ、熾ニ勞力ノ結果ヲ顯ハサシメ
ンニハ、須ク先ツ之レガ利用ノ途ヲ大ニ開カザル可ラズ。保護論ヲ唱フル
者ハ保護稅ハ不適當ナル産業ヲスラ發生セシムト云フガ故ニ國內ノ産業ヲ
増殖スル効アルハ、争フベカラズ、夫レ國內ノ産業ノ衆多ナルコトガ、國
民ニ取リテ利益ヲ生ズルニ二アリ（上田貞二郎著外國貿易原論百五十二頁）
（第二）、一種ノ産業ニ關シテ、不景氣ヲ生ズルモ、他ノ産業ノ好景氣ニヨリ
テ、之ヲ補フニヨリ、國民一般ノ恐慌ヲ生セザル事、（第二）國內青年勞働
者ヲシテ、其性質ニ最モ適當ナル事情ニ向ハシムル事はナリ。此第一ノ點
ニツイテ、或學者ハ保護稅ノ方法ニ依リテ、一國ヲシテ多數ノ外國ト貿易
セシムルト同時ニ、多種類ノ産業ヲ國內ニ存立セシムレバ、或程度マデ、
自足ナル國民經濟ヲ樹立シ、恐慌ノ危險ヲ免カルベキヲ主張ス。蓋シ國內
重要輸出品ノ種類ハ、極メテ少ナク、輸出先ナル諸國ノ數モ、マタ指ヲ屈
スルニ過キザレバ、或一國又ハ或一事業ニ關シテ、不景氣ヲ生ズレバ國內

ノ經濟ニ其影響ヲ及ボシテ損害ヲ與フルコト大ナルガ故ニ可成影響ノ及ブ
範圍ヲ擴張シテ、損害ノ度ヲ少ナクス可シ即チ一輸出先ノ不景氣ヲ補フニ、
他ノ輸出先ノ好景氣ヲ以テシ他ノ物品ニ於ケル失敗ヲ補フニ、一ノ物品ニ
於ル成效ヲ以テスルニ至ラシムルハ必要ナル事ナリ、且萬一産業ガ自然
的條件ノ變動ノ爲メ、衰フルコトアルモ國力ノ衰頽ヲ來サ、ラシムルニハ
國內ニ産業ノ多キヲ要ス。次ニ第二ノ點ニツイテ、勞力ハ其經濟事業ノ爲
メ、切要ニシテ須臾モ之ヲ等閑ニ附ス可ラズ、然ルニ勞働者ノ能力ガ此レ
ニ適シテ彼ニ適セザル者アリ、若シ其能力ヲ誤用スレバ、各個人ヲ以テ成
立セル國民其者ノ爲メ莫大ノ利益ヲ拋棄スルコトナルベシ、故ニ國富ノ増
殖ヲ計サンニハ、人々特有ノ能力ヲ充分ニ活動セシメザル可ラズ。是レ即
チ國內ニ多種ナル産業ヲ存在發達セシムルノ必要アル所以ナリ。産業ノ種
類愈々多ケレバ、各人其長處ヲ發揮シ、事業振作ヲ助クルノ機會愈々多ク、
遂ニ勞力ハ殆ド用キ盡シテ餘蘊ナキニ至ルベシ。果シテ然ラバ國家ハ務メ

テ種々ノ産業ノ奮興ヲ企圖スベキヤ明カナリ。而シテ此目的ヲ達センニハ、一國ノ政府ハ、漫ニ之ヲ自然ノ進行ニ放任シ去ル可カラズシテ、須ク保護ノ政策ヲ採ラザル可カラズ、且夫レ保護貿易ハ、一個人一地方ノ小經濟團體ヲ統一シ、一國內ニ必要ナル日用品ヲシテ成ル可ク自己ノ國ニ生産セシメ、他國ニ依頼セズ、經濟的ニモ獨立スルヲ得ルモノニシテ此結果ヲ得ルニハ多種ノ産業が存在セザル可カラズ。又政治上ノ理由ヨリ觀レバ、農業者ノ保守主義ト、工業者ノ進取主義トハ、相箝制シテ國運ノ進歩ヲ圖ルヲ得、即チ農民ハ常ニ自然ヲ相手トシ、自然ニ支配セラレテ業ヲ行フニヨリ、其性質保守的トナリ質朴剛健ノ氣象ニ富ミ、一朝事アル場合ニハ、進テ義勇公ニ奉ズル事ヲ辭セズ、古昔兵ノ強キハ農業ノ賜ナリ、然シナガラヨク伶俐ニ立働テ、進歩ノ速度ヲ促カス事能ハザルノ短所アリ、此點ニ付テハ、商工業者ハ農民ニ優ル、蓋シ商工業ハ、常ニ新思想ヲ案出スルニ依リテ、自ラ進歩的トナル彼ノ文明ノ進化ハ、都會ニ初マルト云フ、故ニ國ノ富強ヲ

欲セバ、進歩的ノ商工業ト保守的ノ農業トハ、並ビ立タザル可ラズ。

ロツシエルハ曰ク、保護策ヲ以テ製造業ヲ伸張セシムルハ、獨リ經濟上利益アルノミナラズ、政治上亦大ナル利益アリ、殊ニ人民ノ階級ノ制度ニ關シテモ亦然リ、之ヲ史ニ徵スルニ古來豪族ナル者ハ、概テ農ヲ以テ其勢力ヲ維持シ、中古歐洲ニ於テハ、廣大ナル田圃ヲ領有シタル豪族、獨リ政權ヲ弄シ、其力他ノ民衆ヲ凌キタリシガ、市府漸ク興起シテ、工業榮ユルニ及ビ、其勢力大ニ挫破セララルルニ至レリ、蓋シ工業ハ平民主義ヲ誘ヒ、進取ノ元素ヲ養成シ、以テ貴族及保守ノ兩主義ヲ含ム農業ノ欠點ヲ矯正シテ、遂ニ國家ヲシテ完美ノ域ニ達スルコトヲ得セシムルニ足ル。サレバ、政治上ノ點ヨリ觀察スルモ、政府ハ農業ト共ニ他ノ生産業ヲ助成セザル可ラズ云々ト。

以上述ブル所ヲ觀レバ、農工商二業鼎立策ハ、保護論者ノ理論上主張ス可キ所ナルノミナラズ、政府モ宜ク自ラ進ンテ經濟上政治上ノ利益ヨリ打算

シテ一國內ニ各種産業ノ増殖發達ヲ圖リ民福ノ上進ヲ期セザル可カラズ。

第二節 保護稅ハ經濟界ノ激變ヲ防ギ恐慌ノ救濟策トナル

從來輸入禁止、若クハ非常ニ重キ保護稅ヲ實行シ來リシニヨリ、不適當ナル産業マデモ發達セシメ居ル國ガ新ニソノ門戸ヲ開放シテ外國貿易ヲ營ムニ、若シ其ノ國ガ割合ニ多額ノ貨幣ヲ流通セシムルトキハ正貨ノ輸出超過ニヨリテ國內ノ物價下落シ、相手國ノ物價ト平均スルニ至ルマデハ、外國ノ商品ハ頻リニ內國ノ市場ニ横行シ內國ノ生産業ヲシテ止ムヲ得ズ悉ク停止又ハ減縮セシムルコトナキヲ保セズ。斯ノ如キ狀態ガ數年ノ久シキニ巨ルトキハ、資本家ハ其ノ元金ノ消耗ニ苦シミ、勞働者ハ其ノ糊口ノ道ヲ失ヒ、國民ヲ舉ゲテ恐慌ノ慘狀ニ瀕セシムベシ。然ルトキハ金銀ノ流通外國ト平均ヲ得テ新ニソノ適當ナル事業ヲ起スベキ時機到來スルモ、人民ノ技術元氣共ニ傷失シタレバ容易ニ以前ノ如キ健康ニ復スル事能ハザルベシ、是レ實ニ經濟上急激ナル變化ヨリ生スル害ナリ。此ノ害ヲ避ケンニハ、

保護税ノ方法ヲ取ルベシト云フモノアリ。即チ此場合ノ保護税ノ制度ハ先ツ相當ノ輸入税ヲ制定シテ一時ニ外國品ノ侵入シ來ルヲ防ギ、然ル後漸次ニソノ率ヲ遞下シテ數年後ニ全ク自由貿易ノ状態ニ變セシムベキナリ。然ルトキハ資本家ヲ苦シメ勞働者ヲ困難ナラシムルヲ無クシテ産業界ノ慘狀ヲ防グコトヲ得ベシト是レ所謂防衛關稅主義ノ說ニシテ種々ノ事情ニ因リ右述ノ如キ國狀ヲ呈スル國ニ於テ適用セラル。次ニ一說ハ外國貿易ハ國際分業ノ利ヲ完全ニセルモノナリ。然ルニ天下ノ事利アレバ必害アリ恐慌ハ即チ分業ノ利益ニ伴フヨリ生ズル害ノ一ナリ、カクテ保護税ニ依テ即チ外國貿易ノ極端ナル發達ヲ制限シ之ニ由テ恐慌ノ力ヲ殺ガントスルノ論ヲ生ズ。蓋シ地方的分業ノ規模過大ナルニヨリ生産者ト消費者トヲ遠ザケテ物品ノ供給者ヲシテ其ノ需要ノ前途ヲ豫想スル困難ヲ大ナラシムルハ實ニ近世經濟組織ノ最大欠點ニテ國際分業ノ弊ハソノ特ニ甚シキモノナリ。サレバ此ノ弊ヲ矯正スル策ヲ講スルハ更ニ目下ノ緊要問題ト言ハザル可カラ

ズ。此即チ米國ノ學者エー、エフ、ウオーカー氏ガ右ノ説ヲ推シテ保護論者唯一ノ論據ト稱シタル所以ナリ。(ウオーカー經濟學第二章八三項)此説ハ米國ノ如キ國狀ニアリテハ適用セラレザルニアラズ。

思フニ凡ソ經濟界ノ發達ハ四季寒暑ノ迭代ノ如ク勉メテ其急激ナル變更ヲ避ケザル時ハ必ズ資本ノ破壊ヲ來スモノナリ。サレバ國際分業ノ革新セララルルニ際シテハタトヒソノ慘害全國ヲ荒蕪ニ歸セシムルマデノ極度ニ達セザルモ尙ホ著シク轉業困難ヲ生ズベキ虞アルトキハ最モ注意シテソノ急變ヲ避クルニ勉メザル可ラズ、ユノ場合ニ於テ一時保護稅ヲ設クル如キハ蓋シ已ムヲ得ザル措置ナリト知ルベシ。

第三節 國民ノ必需品及戰時ノ軍用品ヲ外國ニ仰ク

ベカラズ

保護ノ論ヲ主張スルモノノ説ニヨレバ國民日常生活ノ必需品ヲ外國ノ供給ニ依頼スルハ一國政治上ノ獨立ヲ危險ナラシムルモノニシテ若シ一朝敵國

ト覺テ生シ干戈相交ユルノ時ニ至リテハ事ニ關累セル外國ノ物品ハ供給ノ途杜絶シ我國民ハ勢ヒ降服セザル可ラザルニ至ル蓋シ外國貿易ヲシテ最モ極端ナル發達ヲ遂ケシムル時ハ國民ノ必需品ヲモ他國ノ供給ニ仰グトナルベク、サレバ一旦戰端開ケ外國ノ供給絶エ若シクハ妨遏セララルルニアルニ方リテハ不得已急ニ其不慣熟ナル產物ヲ興サザルベカラズ此決シテ容易ノ業ニアラザルノミナラズ必ス非常ノ危險ヲ伴フモノナリ。現ニ英國ハナボレオン戰爭以前ニソノ穀物ノ供給ヲポーランド及ヒプロシアヨリ得ツツアリシタメニ有名ナル Continental System ノ布告ニヨリテ大陸ト英國トノ交通ヲ遮斷スルノ政策ハ英國ノ商權ヲ撲滅セントシ一時非常ノ困難ヲ蒙リ急ニ荒廢セル畑地ヲ耕作シテ僅ニ其孤立ヲ全クスルヲ得タリ。マタ同國ヲシカシヤ地方ニ於ケル紡績工場ニハ米國南北戰爭ノ際ニハ從來ソツ棉花ノ供給ヲ全ク南方諸州ニ仰ギシニヨリ其輸入ノ杜絶スルト共ニ Cotton Famine 『棉花饑饉』ヲ惹起シタリ。斯ノ如キ危險ヲ防グ方法ハ即チ保護稅ノ賦

課ニヨリテ平時ヨリ國內ニナルベク多種類ノ産業ヲ維持スルニ在リ尤モ熱帶地方ノ特産物ヲ温帶國內ニ生産スルガ如キハ到底望ムベカラザレ尺少クトモ人民ノ生活ニ必要缺クベカラザル食料品ハ之ヲ他國ニ仰ガザルノ道ヲ講セザルベカラズ。是ハ實ニ治ニ居テ亂ヲ忘レザル策ナリ。然ルニ平素ヨリ此道ヲ講ジ置カザルトキハ俄ニ四隣皆敵トナリ充分ノ封鎖ヲ蒙ルガ如キニ至リテハ軍糧斷絶シ兵卒ガ戰場ニ奮闘シ能ハザルノミナラズ國內ノ老弱モ亦餓死ニ瀕セザルヲ得ズ。其故ニ國民ノ安全ヲ計ラント欲セバ須ク平時ニ於テ其國產ヲ保護シ之レヲ發達セシメ務メテ外國輸入ニ仰ガザルヲ必要トス。

又兵器其他ノ軍需品ハ外國ニ仰グテ避ケテ自國ニ於テ巧ミニ之レヲ造リ出ストトナ計ラザルベカラズ之レガ爲メ政府ノ保護ヲ必要トスルモノニシテ即チアダムスミスモ『防禦ハ便利ヨリ大切ナリ』ト言フ理由ノ下ニ雙手ヲ舉ゲテ古ヘノ航海條例ニ賛成スル所以ナリ。

第四節 外國品ノ輸入ニ對シテ課税スルノ必要アル

ハ國産ニ課スル租税ヲ補償スル爲也

英國保護論者ハ曰ク、英國ノ農夫ハ、露國ノ農夫ニ比シテ、更ニ數多ク、而モ一層嚴酷ナル租税ヲ負擔ス、サレバ保護税ヲ以テ、此差額ヲ補償シ、本國ノ生産業ヲシテ外國ノ生産業ト同様ノ負擔ナラシムルハ、至當ノ事ナリト、實ニ至言ト謂フベシ。内國商業ニ從事スル者ハ、外國競争者ノ負擔セザル種種ノ租税ヲ支拂ハザル可ラズ今假ニ若シ内國産業者ニシテ此負擔ノ補償ヲ受ケザル時ハ外國輸入者ト同一ノ地位ニ立ツト得ズシテ、甚タ不利ヲ蒙ルガ、故ニ、内外貨物ヲ對等ノ境遇ニ立タシメント欲セバ、外國品ニ對シテ須ク國産税ト同率ノ輸入税ヲ課スベク、斯クテ外國ノ競争ヲ免カレシメ、或ハ全然免カレシメザルマデモ、之ヲ輕カラシムベシ。思フニ保護輸入税ノ最モ穩和ナルモノハ、内國ニ於ケル租税ノ負擔、其他天然人爲兩方面ニ於テ、生産條件ノ劣レルヨリ生ズル損失ニ依テ、國內ノ産業ガ

外國ノ競争産物ニ對シテ、不利益ノ地位ヲ恢復セシメンガ爲、此損失ノ負擔ヲ標準トシテ、輸入税ヲ賦課スルニ在リ、所謂均衡關稅ト稱シ、彼ノ勞働保護法ノ結果トシテ生ズル負擔ヲ補フノ趣意ニ出ヅル社會的保護關稅ノ如キモ、亦此類ニ屬ス。蓋シ國産稅ノミ課セラレテ、外國ノ物品ハ其國ニ於テ、普通一般ノ租稅ヲ課セラレザルハ、甚ダ不公平ニシテ、本國ノ産業ハ、不利益ヲ蒙ルモノ頗ル多キガ故ニ今其不利ヲ償フ爲ニ輸入税ノ方法ヲ採リ外國産物ヲシテ内國品ト其課稅ヲ分擔セシム可シト云フニ在リ。此論旨モ亦アタムスミスノ允許スル所ナリ。

以上本章四節ニ分述セシ處ハ保護論主張ノ有力ナル點ナルガ吾人ハ今ヤ進んで保護政策ニ對スル批難ノ點ヲ研究セントス。

第六章 保護貿易ニ對スル反對論點

第一節 保護策ハ所謂一般自然ノ通則ニ反ス

論者曰ク、完全ナル政府ガ産業ニ對シテ行フベキ唯一ノ職分ハ、之ヲ自然ニ發達セシムルニ在リト、此見解ヲ抱クノ學者多クハ、政府ノ干涉ヲ排シテ、自由放任ヲ説キタリ十八世紀ノ中葉彼ノ重農學派ガ始メテ經濟學ノ基礎ヲ建テタル時ニ當リ如何ナル學說ヲ社會ニ普及シタリヤト云フニ曰ク、政治家ノ本務ハ、法律ヲ制定シテ、産業ニ干涉スルニアラズ、唯單純ニシテ永久不變ナル自然法ヲ侵略セズシテ、能ク之ヲ保護確定スルニ在リ、若シ政府ニシテ産業ニ干涉スル事ナク、之ヲ自然ニ放任スルニ於テハ、自然法ノ作用ニ依テ、生産自カラ發達スベシト（ジナウ井ツク著經濟政策參照）アダムスミスハ分業ノ利益ヲ基礎トシテ自由放任ヲ唱ヘ爾後氏ヲ祖述セシ學者多クハ同一ノ見解ヨリ自由放任説ニ賛セリ又ハバスターブルノ如キモ、

亦曰ク『各國ハ其生産上特ニ自國ニ適スル所ノ物品ヲ輸出シテ、之ニ易フルニ自國ニ於テ産出シ難キ所ノ貨物ヲ輸入スルヲ以テ、一般ノ通則ナリ』ト、(パスティーブル)國際易論原著第一章十八頁一即チ自國ニ困難ナルモノヲ棄テテ容易ナルモノノ生産ニ從事シ、所謂長所ヲ以テ短所ニ替ユルノ通則也。抑モ長短相補ヒ、有無相通スルノ利ヲ全フセント欲セバ、先ツ國境距離ノ道路ヲ利用シテ、交通ノ便ヲ計ラザル可ラズ、故ニ近世文明ノ進歩ニ因テ、海ニ汽船アリ、陸ニ鐵路アリ、又ハ電信ノ術行ハレテ距離及時刻ヲ短縮スルニ至リ之レニヨリテ近世産業ハ著シク發達セリ。然ルニ輸入品制限ノ關稅ハ營業上ノ妨害物ニシテ賣買ノ自然的進行ヲ阻止スルモノト云フベシ從テ世界各國ハ爲メニ天涯比隣ノ和親ヲ得ル能ハズ豈ニ遺憾ノ事ニ非ズヤ、サレバ國際間ニ於ケル交易ハ政府干涉ノ障壁ヲ除キ去リテ、一般自然ノ通則ニ合セシメテ生産費ヲ低廉ニシ、從テ物品ノ供給ヲ饒多ナラシメザル可ラズ、然ルニ保護論ハ、之ニ反シテ、自國ノ適否ト、人民ノ利害トヲ顧ミズ、

凡テノ物品ハ、皆自己ヨリ之ヲ生産セシメント欲シ、外國ニ仰クヨリ、遙ニ不廉ナル物品ト雖モ、自ラ其産出ニ從事セザル可ラズ。換言セバ、自國ノ短所トスル産業ヲモ、敢テ作爲スベシト做ス是レ其國固有ノ長所ニ安ンセズシテ、徒ラニ外國ノ産業ヲ羨慕シ、之ヲ奪ハシ事ヲ企ルモノニシテ、自己ノ適物ヲ精製シテ之ヲ輸出シ以テ其利益ヲ交換スルコトヲ思ハズ、結局自己ノ長所ヲ傷害スルコトヲ悟ラザルモノナリ。而シテ此保護策ヲ行フ政治家ハ、生産業ヲ一層費用多ク且劣悪ナラシムルノ傾キアルノミナラズ、國民ヲ驅リテ豐饒ナル土地、繁榮ノ市場ヲ棄テテ、礫礫ナル土地ヲ耕作シ、衰微ノ市場ニ賣買スルニ至ラシムルノ道ヲ求ムルモノナリ、果シテ然ラバ、物價ノ騰貴供給ノ缺乏ハ、勿論、産業ノ發達到底得テ期ス可キニ非ズ、之ヲ要スルニ保護策ハ、人爲ノ力ニ藉リ、自然ノ則ニ背馳シテ、社會ノ進歩ヲ退却セシムルモノト云フ可シ。

第二節 保護制度設置シタル後ニ一旦之ヲ廢止スル

時ハ企業家及ビ勞働者ハ大ニ損失ヲ招クノ

虞アルガ故ニ容易ニ之ヲ撤去スルコト能ハズ

元來毫モ保護政策ヲ執ラザル國ハ、姑ク措キ、苟モ之ヲ施行シ居ル國ニ於テハ、其結果トシテ、必ス内國ノ物價ヲ高クシテ、消費ノ利益ヲ殺グモノナレバ、生産者ノ受クル利益ハ、コノ消費者ノ損害ヲ償ヒテ餘アル場合ニ限り、之ヲ行フベキモノニシテ特ニ外國ヨリ廉價ノ穀物輸入セラルル場合ニハ、善ク右等ノ事情ヲ審査セザレバ、或ハ徒ニ少數ノ地主ニ對シテ、無法ノ地代ヲ與フル爲、大多數ノ商工業者及勞力者ヲ苦シムル拙策トナルベシ、若シ此拙策ヲ永遠ノ國是トスル如キ事アラバ、元ヨリ絶滅ニ歸スベキ産業ヲシテ、不當ニ繁榮セシメ、只消費ノ損害ヲ來スノミナラズ、或ハ保護稅ノ温室内ニ、獨占業ノ黴菌ヲ飼養スル奇觀ヲ呈スベシ、故ニ一度ビ保護ノ下ニ發達スルノ産業アレバ、資本家モ勞働者モ、共ニ保護ノ程度益々優渥ナランコトヲ希望シテ、底止スル所ヲ知ラズ。殊ニ保護ノ適用ヲ受クル事

業多キ時ハ其利害ヲ代表スルモノハ一勢力ヲ爲シ政治上ノ方鍼ヲ左右シテ保護策ノ廢止ヲ困難ナラシム、米國ノ如キ幼稚ナル産業保護ヲ理由トシテ保護政策ヲ實行スルニ拘ラズ未ダ曾テ産業ノ發達完全ナル域ニ進ミテ之ヲ廢止スルモノアルヲ聞カズ。保護關稅ハ米國ニ確乎不拔ノ政策トナルガ如キ此事實ヲ證明シテ餘アリ、何ントナレバ旣ニ保護策ノ爲メ漸漸隆盛ノ域ニ進メタル産業ニ從事セル企業及勞働者ハ若シ一旦此政策撤去セラルルニ於テハ夥シキ損害ヲ蒙ムルヲ免カレザルノミナラズ、此輩ハ曩ニ保護策ノ爲ニ其資本勞力ヲ充分ニ使用シ享受ノ利益遂ニ斷然廢棄スルノ不幸ニ遭遇セバ其他業ニ移轉スルノ困難ハ實ニ名狀ス可ラサルニ至ルベケレバナリ。夫レ産業ガ保護ノ下ニ發達シテ確實タル地步ヲ占メ保護稅ノ存在セザルモ相當ノ收益ヲ得テ獨立經營ノ目的ヲ達スルニ至ルト同時ニ保護稅ヲ廢止スルノ必要アルモノニシテミルハ勿論リストモ亦之ヲ認メ保護ヲ適用スル時期ヲ一時ニ限ル可キヲ主張セリ、サレバ時ヲ限りテ行ヒタルノ保護稅ヲシ

テ永久繼續ノモノタラシメンニハ、實ニ企業勞力ノ利益ヲ保全スル爲ニ束縛セラレ、却テ自由政策ヲ行ヒタルノ得計タルニ若カザルナリ。

第三節 保護策ハ國民ヲシテ依頼心ヲ增長タラシメ

テ獨立進取ノ精神ヲ消磨セン

彼ノ保護貿易派ノ保護論ヲ唱フルハ、國家的觀念ヲ増進シ、國家ハ人民ノ爲ニ存シ、人民ハ國家ノ爲ニ存シ、兩者相須相依テ發達幸福ノ域ニ進ムベキ事ヲ根據トス。斯論ハ一瞥セバ頗ル允當ナルガ如シト雖モ、其實際ヲ觀レバ、道理ニ適セザル者也、試ミニ一度保護政策ヲ執ランカ、國民一般ノ依頼心ヲ增長シ、皆國家ノ保護ヲ望マザルハナクシテ、生産方面ニ於テ、遂ニ獨立自助ノ精神ヲ阻却スルニ至ル、即チ生産者ノ一團ガ、國家ノ保護ニ浴シテ發達シツツアル場合ニ、他ノ一團方同一ノ保護ヲ要求スルハ、其間ニ自ラ蔓延絶エザルノ道理ナリ。殊ニ保護貨物カ他ノ事業ニ對シ、原料品又補助品ノ關係ニ在ル場合ニハ、此要求ハ益々理由ノ強ヲ致ス可ク、外

國ニ於ル實例ヲ見ルモ、一事業ニ與ヘタル保護ガ、他事業ニ保護ヲ要求スルノ理由ニ援用セラレ、相率イテ保護ノ範圍ヲ大ナラシメズンバ、已マザルノ觀アリ、此レハ人民ガ政府ニ依頼スルノ心、自然ニ長ジテ全ク獨立經營ノ能力ナキヲ見ルニ足ルナリ。

夫レ保護ノ目的ハ、自立スル事能ハザルモノヲ興起セシムルニアレバ、既ニ自立ノ力ヲ具ヘタルモノニ之ヲ施行ス可ラズ、從テ新規ノ工業ハ、凡テ之ヲ保護スベシトイフ論ハ、立チ難シ。例ヘバ既ニ綿紡績ノ工業充分ニ發達セル國ニハ、技術上ノ狀態、之ト酷似セル毛紡績業ヲ起スニ、保護稅ヲ置ク可ラズリストノ定メタル如キ保護時代ニモ、實際保護セラルベキ事業ハ、稍狹キ範圍ニ限ラルルナリ。其結果トシテ國民ノ經濟大ニ發達シタル上ハ、各個人自由競争ヲ得、再ヒ自由貿易ノ主義ニ立戻リテ、國家保護ノ力ヲ求メズ、結局産業ノ世界的統一時代ニ赴ク準備ヲ爲スベキナリ。然ラズシテ輸入ノ禁止ヨリ内國ノ生産者ハ、未ダ曾テ外國競争ノ刺激ヲ受ケズ、

從テ其國ノ資本家勞働者ハ、熱心ニ生産業ニ從事セザルガ、故ニ保護特典ヲ受ケルノ事業ノ外ハ、皆微々トシテ振ハズ、延テ國民ノ志氣ヲ、卑陋ナラシメ、國家ノ取締リニ一任シ、絶エズ、其依頼心ヲ增長スルニ至ル可シ。

是ニヨリテ之ヲ觀レバ、國民ヲシテ完全ニ殖産興業ノ域ニ達セシメントスルトキハ、各自獨立シテ經營スルコトニ努メシメザル可ラズ然ルニ保護ハ之ニ障阻ヲ與フル者タルヤ明ナリ。

第四節 保護策上ノ輸入税ハ實際内國人ノ負擔ニ歸ス

保護策論者ハ、保護税ハ外人ノ負擔ニ屬スルガ、故ニ其ノ國人ハ、之カ爲メニ毫モ損失ヲ蒙ムルコトナシト論スレトモ、然シテガラ保護税ノ結局、其ノ國ノ生産者モ外國品ノ價格マデ、其ノ生産物ノ價ヲ高ムルヲ得ルヲ以テ、自然消費者ハ高價ナル貨物ヲ求メザルベカラザル結果ヲ生ズ、乞フ其所以ヲ明ニセン。抑輸入品ニ對スル課税ハ、消費者之ヲ支拂フヤ疑ナシト

雖モ、其消費者タル者ハ、外國人ニ非ズシテ、輸入品ヲ受ル内國人タルヤ明カナリ。縱令外國人ヲシテ其輸入ノ產物ト内國ノ生産物ト交換スルノ便利ヲ失ハシメ、痛ク損害ヲ蒙ラシムト雖モ、元來國際貿易ハ、一方ニ利アルノミテ他ノ方ニ利アラザレバ、成立スルコト能ハザルガ、故ニ雙方利益ヲ目的トナス者ナルヲ以テ、如何ナル場合ニモ、外人ヲシテ輸入税ノ損失ヲ甘受シテ物品ヲ賣ラシメ、其取引上ノ平均ノ利潤ヨリ低廉ヲ以テ、久シク賣買ヲ爲サシムルコト能ハザル可キガ、故ニ海關ノ課税アルニ於テハ、輸入品ハ勢ヒ高價ニ之ヲ賣却セザル可ラズ。物品騰貴セバ、之ヲ購買スルノ消費者、勢ヒ高キ代價ヲ支拂ハザル可ラズ。保護論者ハ保護税ノ爲メニ、物價ヲ騰貴セシムルニアラズト主張スルモノアレドモ、是レ大ニ誤レリ。假ニ物價ヲ騰貴セシメザルモノトスレバ、其國ノ産業ハ之ガ爲ニ保護ヲ受クルモノニアラズ。從テ輸入税ハ其目的ヲ達シ得ザルコトトナルベシ。然レバ保護税カ國民ノ生活費ヲ高クストイフ論點ニ至リテハ、決シテ疑フ可

カラザル眞理ナリトイフベシ。蓋シ物品ノ國際價格ハ、貿易國間ノ相互ノ需要供給ノ平均ニ依リテ定マレバ、輸入國ノ輸入品ニ對スル需要ノ強弱ガ、直ニ其輸入税ニ對スル内外國人ノ負擔ノ割合ヲ定ムルコトトナル、只ダ實際上輸入國ガ、シヂウイク氏ノ所謂「Buyers monopoly」〔買方ノ獨占〕ヲ有スル場合ニハ、輸入税ヲ外人ニ轉嫁セシムルコトヲ得ベキモソノ他ノ場合ニハ、内國人ガ、ソノ大部分ヲ負擔スルヲ常トス。然レトモ以上ニ述べタル所ハ、一般ノ輸入税ニ關スルコトニシテ只ダ保護ノ效果ヲ有スル輸入税、即チ保護税ノミニツキテイヘバ、ソノ負擔者ハ、内國消費者タルハ明カナリ。抑内國ノ生産ヲ保護スルニハ、輸入品ノ代價ヲ内國ノ生産費ト同様ノ點マデ上ラシメザルベカラズ、サテ輸入品ノ代價ヲ高クスルハ、即チ消費者ヲシテ租税ノ負擔者タラシムルモノナリ。要スルニ保護税ニテ内國人民ノ負擔ニ歸セザルハナク、外國人ノ負擔ニ歸スル輸入税ニテ、保護ノ實績アルコトナキナリ。(上田貞二郎著外國貿易原論百四十一百四十二頁參照)

第五節 保護策ハ保護程度ノ不足或ハ其ノ過當ニ走

リテ實際ハ不公平ノ結果ヲ生ズ

保護税ハ、同一産業ニ愈々保護ノ程度ヲ厚クシ、又他種ノ産業ニ保護ノ範圍ヲ擴張シ所謂累積的 (Cumulative) 作用ヲ爲ス。蓋シ保護セラルル産業ハ、偏ニ之ニ依頼シテ生産ノ改良進歩ヲ計ラザル間ニ、外國産業ハ器械ノ改良ヲ計リ、其生産費ヲ減シ、保護税ノアルニ拘ラズ輸入シテ來タリ、殊ニ物價ガ輸入税額丈高クナルニ至レバ、外國ノ競争品ハ依然従前ノ如ク輸入スルノミナラズ、内國産物ノ當業者ハ、一度加ヘラルルノ保護程度ノ不足ヲ唱ヘテ、再三其増加ヲ請求シテ已マザルニ至ル。例ヘバ佛國獨逸其他大陸諸國ニ於テ、農業保護ノ程度ガ、年ト共ニ厚キヲ加ヘ、殆ト際限ナキガ如ク、工業ニ對スル保護モ亦然リ。前者ノ結果食料品ノ代價ハ勿論、原料及補助品ノ代價ヲシテ騰貴セシメン、隨テ後者ニ於テ製造品ノ生産費モ、亦増加シ、保護税ノ全額マデ代價ヲ騰貴セシムルヲ以テ、保護ノ不足ヲ訴フニ

至レリ。

加之一産業ガ保護セラルトキハ、之ニ關係セル産業、即其他モ亦保護ヲ要求スルノ導火線トナリ、從テ消費範圍ノ廣大ナル貨物ヲ保護ノ目的トスルトキハ其影響ハ累積的作用ヲ爲シ、斯ル影響ノ錯雜紛糾スルコトヨリ、保護政策ヲ取ル片ハ、必ず各種ノ産業ニ、不公平不均衡ナル關係ヲ生ズルガ、故ニ一ノ産業ハ、保護シ、他ノ産業ハ保護セズト定ムル等、實際上到底其區別ヲ立ツルコト容易ナラズ。

抑モ一産業ニ對スル保護ノ程度ハ如何ニシテ之ヲ定ムルヤト云フニ、産業上ニ各々秘密ヲ守リ、其當業者ハ自己ノ要スル保護ノ程度ヲ知ル可キモ、議會ニ於テハ保護スベキ産業ヲ提議スルトキニハ、殊ニ種々ノ産業ノ代表者ガ、相率イテ産業保護ニ力ヲ盡スノ請求ヲ爲セシヨリ、遂ニ産業ノ性質ニヨリテ、區別スル能ハザル有様トナリテ、過當ノ保護ノ決定ヲ爲スニ至リ、其結果ハ永久ニ外國ノ競争ニ堪ヘズ、即チ前途有望ノ度少キ産業ニモ

保護ヲ及ホスニ至ルハ、免カル可ラザル所ナリ。

第六節 保護策ヲ爲スニ當リ自國ノ國土ノ富源ノ程

度ヲ省ミザルハ誤策ナリ

保護論者曰ク、國際分業ノ弊ヲ矯正シテ、恐慌ノ度ヲ減カント欲セバ、保護策ヲ取リテ、自足的國民經濟ヲ組織スルヨリ善キハナカルベシト、實ニ國內ノ情勢ヲ知ラザルノ言ナリト云フベシ。米國ノ如キ土地廣大ニシテ、農産物ノ種類、甚ダ豊富ニシ、工藝品モ亦發達シ、英國ニ凌駕スベキ富源ヲ有スレバ、保護策ニヨリテ自足的國民經濟ヲ作ルモ、甚シキ困難ヲ生ゼザルベキモ、物産劣少ナル國ニテ、之ヲ施サントセバ、僅ニ狹少ナル經濟範圍ヲ組織スルニ過ギズ、國民ノ發達ニ大ナル障害ヲ生ズベシ。且米國ノ製鐵業ノ如キハ實ニ非常ナル損害ヲ其人民ニ與フルナリ、千八百七十年ヲ以テ見レバ、當時地鐵ヲ製造スルノ爲ニ使用セシ資本額五千六百十萬弗、之ニ從事セシ勞力者、二萬七千五百五十七人及ビ其賃銀ハ千二百四十萬弗

ニ達シ、地鐵ノ進口税ハ、一噸ニ付、九弗トシ、其製造スル所ノ地鐵二百萬噸ナルガ故ニ、今若シ此資本勞力ヲ麥若クハ木棉ノ生産ニ從事シ、之ヲ以テ進口税ヲ課セズシテ地鐵ヲ輸入セントセバ、千八百萬弗丈ケ廉價ニテ、二萬噸ノ地鐵ヲ購入スルコトヲ得タルハ、明ナル數ナリ。又假ニ全ク製鐵ヲ止メ、進口税ヲ廢シテ、地鐵ヲ輸入セントセバ、米國人民ヨリ右ノ如キ勞働者ヲシテ毫モ使用セシメズシテ、彼等ニ千二百四十萬弗ヲ與へ、賃銀數ニ當時相應ノ營業所得ノ歩合ヲ七分ト見テ總資本額ニ對シ三百九十二萬七千弗ノ利率ヲ製鐵業ニ與ヘルモ尙地鐵ノ廉價ナルガ爲ニ百六十七萬三千弗ノ利潤ヲ得ベシ。米國製鐵業ノ保護ハ計算上大ナル損害ヲ醸シ、從テ寬大ナル保護貿易ヲ主張スルノ民主黨 Democrat ハ製鐵業廢止ノ議アリテ、共和黨 Republican ノ極端保護論ト相容レサルガ、若シ其國內分業ニ依テ經濟ノ充分ニ發達スル曉ニ至レバ、外國自由貿易ニヨルノ外、ソノ國民的膨脹力ヲ繼續スル能ハズンバ、必ズ自足的政策ヲ棄ツルニ至ルベシ。今假

ニ保護税ノ税率ハ制定ノ當時ニハ、内國ト外國トノ生産費ノ差額ニ符合スルモ、ソノ後ニ至テ、常ニ其差額ト符合セシムルハ、到底能ハザル事ナレバ、多クノ場合ニ多少内國ノ獨占ヲ誘起セザル能ハズ、米國獨逸ニ於ケル近來ノ經驗ハ之ヲ證スルニ足ル、況ヤ小國ニ於テ保護税ハ、單ニ國民ノ發達ヲ妨ゲ、内國ノ獨占ヲ生ズルノミナラズ、延テ恐慌ノ害ヲ大ニシテ、一般ノ需要ヲ充タス能ハザル缺點アルニ於テナヤ。

要スルニ國土ノ大小、及ビ其物産ノ豐歉ヲ顧ミザルモノニシテ、漫リニ保護税ヲ置ケハ、策ノ得タルモノニアラザルナリ。

第七章 斷論

以上自由保護兩貿易論者ノ意旨及其爭點ヲ通覽スレバ、皆理由アリテ孰レ
ナ是トシ孰レナ非トストハ容易ニ斷言ス可ラズ、畢竟自由貿易論者ハ、故
ヲ保護干涉ノ不法ヲ排斥シテ、國情ヲ顧ミズ、保護貿易論者ハ專ラ自由放
任ノ非道ヲ攻撃シテ原理ヲ審ニセズ、雙方共ニ根本的觀念ヲ異ニシテ、遂ニ
一己偏執主義ノ論法ヲ示シ、各極端ニ走ルノ弊アルハ是實ニ自說ヲ主張ス
ルニ急ナルガ爲知ラズ知ラズニ茲ニ至ルモノナラン、況ヤ各自其反對說ニ
於テモ幾分ノ價值アルヲ認メツツ尙且絶對的ニ他說ヲ排斥セントスルハ學
敵ニ對スル感情ノ爲眞理ヲ求ムルニ不忠實ナルヲ證スルニ過ギザルチヤ、
苟モ學者タル者ハ常ニ感情ヲ捨テテ理性的ニ判斷シ一定ノ標準ヲ定メテ國
家社會ノ狀態ニ應適スルノ學說ヲ究求シ時ニ或ハ敵說ノ長所ヲ容ルルノ雅
量ナカル可カラズ、思フニ國際貿易政策トハ、國家ガ其國ノ外國貿易ニ對

シテ行フ政策ニシテ自國ノ經濟ヲ發達セシメ延テハ其政治上ノ位置ヲ強固ナラシムルヲ以テ目的トスルモノナルガ故ニ他國ノ人民ノ爲ニ自國貿易上ノ利益ヲ犧牲ニ供スルコトアル可ラズ去レバ近世ニ於ケル貿易政策問題ノ勃發セシハ、全ク近世ニ於ケル國家思想ノ奮興ニ因ルモノニシテ國家思想ハ人民文化ノ程度ニ隨テ強弱アリ、今日文明ノ進歩セル諸國ニ於テハ此思想盛ナルガ故ニ其貿易政策ハ國家ノ隆盛ヲ期スルヲ以テ標準トセリ固ヨリ此思想ハ長年月間不變ト云フ可ラザルガ、故ニ今世紀ニ於ケル國家思想ハ、或ハ後世紀ニ變遷ヲ生ジ、現代ノ如ク列國並時ノ勢ヒヲ認メズ、萬邦統一ニシテ全世界共和國ト成ルニ至リテハ、現時貿易上ノ政策ノ如キ存在ヲ失フニ至ランモ知ル可ラズ、但シ直ニ之ヲ以テ現在ノ貿易政策ニ實行スルヲ得ズ、現在ノ政策ハ、各國常ニ自國々民ノ利害ヨリ打算シテ保護スルガ利益ナレバ保護シ。放任スルガ利益ナルコト明ナレバ干涉ヲ避クベク、自由放任ノ長所ハ國家ノ利益ト件ハザルコトアリ保護干涉ノ利益ハ國情ト方

法トニ依リテ異ルコトヲ辨ヘザル可ラズ。

第一節 國家ニ於ケル産業發達ノ程度及ヒ社會生活

ノ狀態

獨逸保護學派リスト氏ノ、主張スル所ノ國民經濟ノ發達ノ五時期ナルモノヲ見ルニ第一漁獵第二牧畜第三農業第四工業第五農工商時代トス。此五期ニ於ケル貿易政策ノ適用ヲ概説スレバ（但シ農業時代以前ニ於テハ國家ノ統一未ダアラザリシヲ以テ政策適用ノ期別トシテハ不適當ナレドモ此ノ如キ順序ヲ以テ經來リタル農業時代以後ニ付テ之レヲ見ルニ）即尙農業ヲ主トスル時ニ於ケル國民ハ稍ヤ進歩セル國民ト通商スルニ當リ、自由貿易ヲ採リ、以テ野蠻ノ狀態ヨリ己ノ地位ヲ進メ、且自國ノ農業ヲ改良スル手段トスベク、第三ヨリ第四ニ移ル所謂農工業過渡ノ時代ニ於テハ、須ク保護策ヲ取り、以テ自國ノ製造業漁業及航海業等ノ進歩ヲ期スベシ、而シテ最後ノ時期ニ於テ、富源及國力已ニ最高點ニ達スルニ至リテハ、再ビ自由貿易

ヲ採リ、内外市場ニ於ケル競争ヲ無制限ニナシ、以テ一旦獲得シタル勢力ヲ維持セシムルノ刺激トナスベシ。然ルニ歐洲中ニ於テ、西班牙葡萄牙ハ第三期ニ在リ、獨逸及北米合衆國等、尙第四期ニ位シ、佛國ハ將ニ第五期ニ進マントシ、唯リ英國ノミ最終期ニ達セリト。當今國際競争場裡ニ立テル列國ノ事情ヲ觀ルニ其天然ノ利地理ノ勢差異アルノミナラズ、人口ノ多少物産ノ種類、人民需要ノ性質智力勉強心學術等モ、其權衡ヲ保ツ能ハズ、故ニ文明國ト呼ハルル國々ノ間ニモ何レノ二國ヲ取テ比較スルモ、産業上同等ノ點迄増殖並進セルモノ尙ホ少シ、舊開國ノ農工業ト、新興國ノ農工業トハ、其相去ルヤ甚タ遠シ、蓋シ舊開國ハ、藝術智識ノ發展機械蒸氣力ノ使用ニヨリテ、着々勝利ノ地位ヲ占ムルガ、故ニ其製造品ハ益盛ニ農業國ニ向テ輸出シ、以テ原料品ノ輸入ト交換スベキヲ以テ商工業ノ立場ヨリ云ヘバ自由貿易ニ利アレドモ其國ノ農業ハ新開國ノ農業ニ壓倒セララルヲ以テ衰頽セル農業ヲ保護スルノ必要アリ此ノ如キ場合ニ當リテ貿易政策ハ

如何ニ處スベキカハ一國全體ノ利害ヲ參酌シテ斷ズベキナリ。

之ニ反シテ、新興ナル農業國ハ、富豐ナル農産物ガ、貿易上自由輸出ノ勝利ヲ占ムベシト雖モ、内國製造業ノ稍ヤ振興セントスルニ當リ、己ニ發達ノ工業ト競争ヲ試ミントセバ、遂ニ倒レザルヲ得ズ。何トナレバ新産業國ノ製造ニ於ケル經驗ニ乏シク、機械職工ヲ使用スルノ智巧モ亦未發達セズ從テ製造品ノ精良、估價ノ低廉ハ、遠ク先進國ニ及ハザレバナリ、縱令今日ノ如ク工業隆盛ナル英國ニテモ、前世紀ノ中期ニ於テ、麻布ノ製造殊ニ拙ク、其内地需用ノ品スラ、多年外國ヨリ輸入シ、始終重厚ナル保護ヲ加ヘテ、纔ニ存立スルヲ得シノミ、而シテ近頃麻布ノ製造、殊ニ一躍ニシテ佛國ヲ凌駕セリ。又英國カンニング氏、自カラ巴里ニ赴キ、佛國執政ブイルル氏ト會シテ、自由貿易ノ利ヲ説キ、其英國ニ倣ハンコヲ勸メシニ、當時ブ氏之ヲ謝絶ス、其答辭ニ曰ク、

英國今日ノ進歩ヲ以テスレバ、漸ク其制度ヲ寬ニシテ、他國ノ競争ニ任

スモ、敢テ國利ニ背馳スルナカルベシ、然モ倣邦今日ノ工業ハ、未ダ貴國ノ發達ヲ極ムルガ如クナラズ、其利尙叮嚀ニ庇護ヲ加フルニ在リ、倣邦ノ製造モ、他國競争ヲ恐レザルニ至ラバ、謹テ貴邦ノ例ニ倣フベシト

(大島貞益譯李氏經濟論二百四十八頁參照)

由是觀之、貿易政策ハ、國家產業發達ノ程度ニ應ジテ變動アリ、決シテ一定不易ノモノニ非ズ、詳言セバ國家膨脹力ノ大小ニ從テ、ソノ執ルベキ貿易政策ニ變化ヲ起サザルヲ得ザルモノナリ、或時代ニハ、保護政策ヲ執ルベクシテ、全ク時勢ヲ異ニスル後日ニ於テモ、同一ノ政策ヲ株守スルノ必要ナシ、其各々時代ニ伴フテ適當ナル政策ヲ施サザル可カラズ、苟モ國家ノ實業教育、特ニ工業上ノ智識ハ、大ニ進化シ科學技藝ノ應用ニヨリテ、種々ナル産業ハ、均シク繁榮ノ域ニ達シ、所謂世界強大國ノ班ニ列スルヲ得タレバ、貿易上ニ個人ノ自由競争ヲ逞フスベシト雖モ、實業教育ノ尙幼稚ニシテ國民ノ生活程度極メテ低ク奢侈品ノ必要無ク自國民ノ製造品ヲ

以テ自國民ノ需要ヲ供給シテ満足セル國ニ向ツテ一旦隆盛ナル國ノ製造品突然侵入スレバ内國微弱ノ新産業ハ到底之ニ抵抗スル能ハズ、茲ニ於テカ己ムテ得ズ防禦力ヲ他ヨリ藉ラザルヲ得ズ、即極端ナル保護政策ヲ楯ニ執リテ自己ノ弱處ヲ補フノ外ナシ。故ニ保護貿易ハ國家偶然用フル防禦手段タリ、産業程度發達シタル強國間ニハ、決シテ相對的關係ヲ忘失シテ其政策ヲ偏執ス可ラズ。

終ニ臨ミテ注意ス可キ事アリ何ゾヤ、或人問テ曰ク國家カ或ル特殊ノ産業ノミヲ厚ク保護スルハ甚不公平ニアラズヤト、余ハ答テ曰ク然リ曰ク否、夫レ露國ハ農業國ニシテ英國ハ工業國ナリ其立國ノ策トス可キ産業ハ國ニ依リ元ヨリ同シカラズト雖、其主眼トスル産業ヲ特別ニ厚護スルハ一國ノ富強ヲ増シ依テ以テ間接ニ他ノ産業者ヲ保護スル所以ニアラズヤ、夫レ國家ハ同時ニ總テノ方向ニ進ムヲ得ズ止ヲ得ズンバ一道ヲ進マンノミ。

第二節 一國內經濟發達ニ於ケル歴史的順序

抑モ如何ナル事物タルヲ問ハズ其進化スルヤ必ズ相當ノ順序ヲ經由ス可キ
モトス、然リ而シテ我經濟界ノ發達歴史モ亦此原則ノ軌道ヲ逸スル者ニアラ
ズシテ通常其踐踏ス可キ階段ヲ有ス、夫レ社會經濟ノ進歩ヲ區別スレバ第
一期一家經濟時代第二期市府經濟時代第三國家經濟時代及第四期宇宙經濟時
代ノ四トス。一家經濟トハ一家ヲ基礎トシテ生産分配等ヲ行フモノニシテ
主トシテ大古ニ行ハレタルモノナリ、市府經濟トハ市府ガ工業商業ノ中心
トナルモノニシテ中古歐洲諸國ニ行ハレシモノノ如キヲ云ヒ、亦國家經濟
トハ一國內ニ於ケル各地方間ノ障壁ヲ除キ一國統一シ、即各國家相待持シ
テ專ラ一國ノ利害ヲ起點トシ以テ自國產業ノ隆盛ヲ計ルモノニシテ今日ノ
諸國ハ皆概シテ此期ニ屬スル者也ト雖モ、百尺竿頭更ニ一步ヲ進メテ社會
經濟ノ狀態益進歩シテ分業ノ區域廣ク宇內萬國ニ渡リ、國名ノ如何ナルヲ
問ハズ價ノ最低廉ナル所ニ生産交易盛ニ行ハルル場合來ルト想像セヨ是即
テ宇內經濟ノ時代ナラン。若シ斯ノ如キ時代ニ於テ經濟ノ眼中國家ナルモ

ノナク隨テ國際間ニ於ケル制限檢束ナク絶對的ニ交易ノ自由ヲ認メラルルニ至ラン。

借問ス第四期宇宙經濟時代ナルモノ果シテ來ル可キモノナル乎茲ニ強大ナル一國ガ今日ニ於ケル諸國ヲ總テ征服シテ世界ヲ統一シ、地球上ニ於テ僅ニ一個ノ國家社會存スルガ如キヲ、秦ノ六國ヲ滅亡シタルガ如キ場合アリヤ否ヤ、噫宇宙統一主義乎是レ豈ニ絶代ノ英傑那翁一世ノ夢想シテ失敗セル歴史ニアラズヤ、況ヤ今日ノ外交政策ハ列強ノ均勢ヲ以テ目標トセルニ於テオヤ假ニ過去ノ進化ノ行程ニ鑑ミテ將來必ズ世界ヲ舉ゲテ一國ニ統一セラルト思考スルモ、尙是科學ノ智識ヲ以テハ其時期ヲ測量ス可カラザル遠キ未來ニ屬ス可ケンノミ。夫レ近キ將來ニ於テ征服的統一ヲ不可能トセバ世界諸國家任意合同ノ如キモ、一種ノ夢想タルニ過ズ、何トナレバ歷史人種感情ヲ異ニセル各國ガ何ヲ以テカ一國家ノ下ニ集ル可キ。縱令一步ヲ讓テ能フトスルモ、久カラズシテ終ニ破裂ノ情態ヲ見ハスニ至ラン。然レバ則チ第四期

宇宙經濟時期ノ到達ハ余輩之ヲ好マザルニアラズト雖モ容易ニ來ラザルニテ奈何セン吾人ハ今日國家經濟的時代ナル意義ヲ須ク自覺セザル可ラズ。

第三節 結論

貿易ノ盛衰ハ、殆ド國家才力ノ程度ヲ推測スル尺度タラントスルノ有様トナレリ、夫レ眞正ナル貿易ハ、内國ト外國トノ別ナク、有餘ノ生産ヲ以テ缺乏スル所ノ他物ト交換スルモノナレバ、其遂行ノ一事ニ依テ、兩者同等ノ利ヲ享クルハ、誠ニ貿易ヲ成立スルノ要素ナリト云フベシ、サレバ、斯ル雙方ニ利潤ヲ與フル貿易ノ盛大ニ行ハルルハ、世界民族ノ一大幸事ナルガ、故ニ根本的貿易ナルモノテ、其性質上ヨリ研究セバ、終ニ宇宙內經濟世界統一政策ヲ以テ、其極ニ達スルノ目的トスベキナリ。假ニ今ノ世紀ニ於テモ各國皆大ニ門戸ヲ開放シテ、以テ貿易ノ自由ヲ許シ、天下ト共ニ平等ノ福利ヲ享ケントスレバ是レ貿易ノ眞意義ヲ顯ハスモノニシテ、人類偉大ノ幸福タリ。

然レトモ是ハ未來ノ黃金世界ヲ理想セルモニシテ、未ダ之ヲ現在ノ國家ニ施行スベキニ非ザルナリ。現在ノ商政ハ、現在ノ國情ヲ審察スベキモノニシテ、其國情ニ應ジテ自國ノ利益自國ノ發展ヲ主眼トシテ政策ヲ立ツ可キナリ。熟觀察スルニ今日歐米ノ強大國ハ、物質的文明、相互ニ進歩シ、而シテ此文明ヲ應用セル製造業ハ、益々發達シ、甲國ニ一業ノ興ルヲ見レバ、乙國モ亦直ニ此業ヲ倣造シ、以テ之ニ抵抗シテ、一國獨占ノ大利ヲ有セズ例ヘバ英國ト米國トハ、同一ノ産業品ヲ出ス場合ニ、各一方ヨリ他方ニ輸出スル時ニハ、國際價格ハ同様ナラズト雖モ、運賃保險料其他ノ雜費等ノ損失アルヲ以テ、輸出入國共ニ盛大ナル利益ヲ受ケズ、此ニ依テ強大國間ノ競争ハ、常ニ平和ヲ保テテ、強國ガ弱國ヲ壓迫スルノ情態ト同シカラズ、即チ産業力ノ充實シタル同等國間ニハ、貿易ガ利害ノ權衡ヲ保持シテ獨リ一國ガ多大ナル利益ヲ占ムルコト能ハズ。其結果トシテ、強大國ノ製造品ハ、轉ジテ利益多キノ地へ輸出セラル利益多キ地トハ即チ經濟上弱者ノ地

位ニ立ツノ地也凡テノ物體ハ、抵抗力無キカ若クハ比較的抵抗力ノ弱キ方面ニ膨脹突張シ、水ノ壓力ハ、堤防ノ最モ弱キ處ニ向テ直ニ之ヲ決潰シ、膨脹ノ勢ヲ逞フスルコトヲ見レバ、經濟界ノ壓力モ亦產業力ノ弱キ處ニ向テ膨脹スル事ヲ知ルベシ。但シ產業力ノ弱キノ國內ニモ、獨立自衛ノ權ヲ完具スルニヨリ、直ニ其自衛權ヲ振テ、自ラ防禦ヲ行フ、即チ西班牙葡萄牙伊太利ノ如ク、保護貿易策ニ依頼シテ、強大國ノ產業膨脹力ノ侵入ヲ阻止スルコトヲ得ベク、爲ニ強國ノ物産ハ、是等ノ國ニ膨脹スル能ハズ、更ニ轉ジテ是等ノ防禦力無キノ弱國ニ侵入シ、保護政策ヲ行フノ能力無キ純然タル農業國ニ向テ膨脹ス、即チ歐米諸強國ハ、製造物ノ裕餘ヲ以テ、亞細亞、阿弗利加、南洋諸島ノ諸國ニ輸出シテ、利ヲ爭ヒ、又自國品販路ノ立脚地ヲ鞏固ニスル爲、殖民政策ヲ實行スルノ必要アルガ、故ニ各國方未開ノ弱國內ニ、領土ヲ獲得シ、商業ヲ擴張セシハ、民族膨脹ノ止ヲ得ザルノ事實タルモノニシテ、歐洲強大國中、如何ナル國モ斯ル野心ヲ抱カザル

ハナシ。

且夫レ民族ノ膨脹ハ、貧富ノ懸隔アリテ、貧民救濟ノ問題ヲ起ス、即富ノ膨脹、殊ニ其偏重ハ、國民一部ノ困窮ナルガ、極端ナル社會主義ノ如キ愈其毒害ヲ増シテ、國家ハ此不平ヲ補救セシムルノ方法ヲ講ゼザル可ラズ、其方法ハ國家社會タルノ帝國主義ト稱シテ、國力ノ膨脹ヲ亞洲南米亞弗利加南洋諸島ノ地ニ轉向シテ突進シ、數多ノ列強國ガ、皆此方法ヲ取ラザルハナシ、即チ輸出國ハ、獨リ一國ニ止マラズ、同一地方ニ向テ、同一ノ貨物ヲ輸出シ、以テ競争ヲ開始スルモノ尠カラズ、其ノ原因ハ、國際貿易ニ失敗シタル國ハ、殆ド産業膨脹ノ勢力、獨立ノ體面ヲ保ツ能ハザルノ傾キアルヲ以テ、各國ハ其自衛上、之ヲ等閑視スルヲ得ザルナリ、從テ各國ノ貿易政策ヲ觀レバ、極端ナル自由主義ヲ執ル者ハ、尙寥々タリ。列強ハ以上述ブルガ如キ次第ニテ各自自國ノ勢力ヲ擴大スルニ適當ナル方策ヲ取レリ依テ此等列強ニ對シテ受身ノ地位ニ立テル國ハ其實力ノ許ス限り之レガ防衛ノ

策ヲ講ズベキハ今日國際競争場裡ニ立テ自國ノ安全ヲ保持シ進ンデ國力ノ發展ヲ希望スルモノノ忽ニスベカラザル所トス。抑モ吾人ノ最モ貴シトスル點ハ現今ノ時勢ニ、實際應適シテ、將來最大ノ目的ニ達スルノ地歩ヲ準備スルコトニ在ルナリ、其實地ノ情况ハ千差萬別ニシテ、唯一ノ方法ヲ以テ、其目的ヲ全フスルヲ得ズ、サレバ保護トイヒ、自由トイフモ要スルニ其時ヲ得レバ榮エ、其ノ法ヲ誤レバ敗ルルモノニテ、政策ノ妙ハ時代ノ潮流ニ乘スルノ外ナシ、即チ實地ノ順序ニ因リ、自在ノ變通ニ應ジ以テ之ヲ運用スルノミ、彼ノ一國經濟上ノ狀態及其大勢ヲ顧ミズシテ、自由又ハ保護政策ノ一ヲ墨守セントスルガ如キハ、誤レルノ甚シキモノトイフベシ、經濟國民ノ術ハ其人ニ存シ、焉ゾ一定不變ノ主義ヲ以テ、之ヲ萬世ニ推スルヲ得ンヤ。

卒業
論文 **自由保護貿易得失論** 終

序

自由保護貿易之可否，自昔屢經討論，於今日既爲陳腐之問題矣，雖然，此兩者之優劣，本非絕對而不相容，第兩派所主張，各趨於極端，則冰炭以成，有識者類能道之，執一國之商政者，務排膠柱刻舟之陋，以洞觀時局，然後臨機應變，求運用之妙於一心，捨此無他道耳。清國留學生錢君應清，著自由保護兩貿易得失論，頗道破箇中消息，所叙周詳，所論平允，誠佳作也，因思彼清國者，鼓棹於泰西之新思潮也，蓋不勝其遲迴，顧一朝翻然覺寤，使其有爲諸青年，負笈游海外，類皆刻苦

勵精造詣匪淺，設不安小成，益鏗而不捨，嗣是名著大作之爲渡世慈航者，復絡繹付梓，清國之開明，不遂大有所期望耶。錢君此著，爲國而作，頗強人意，余亦且喜且慰，茲請序於余，爲書此言，亦希錢君及其他留學諸君之奮勵云爾。

早稻田大學學長 法學博士 高田 早苗

明治四十年七月

畢業論文 自由保護貿易得失論目錄

緒論

第一章 外國商政之沿革

第二章 外國貿易上之二大主義

第一節 自由保護貿易之意義及其趨勢

第二節 自由保護貿易主義之分派

第一款 自由貿易派

第二款 保護貿易派

第三章 自由貿易論者之主張點及評論

第一節 自由貿易有完全分業之理之利益

第二節 自由貿易保存個人天賦之權利

第三節 自由貿易使國民竭力競爭故產業自然發達

目錄

第四章 對於自由貿易之反對論點

第十節 放任其幼稚之產業與斷傷自然物無異

第二節 自由貿易利於個人而未必利於社會故權利爲薄弱

第三節 自由貿易論者缺國家的觀念

第五章 保護貿易論者之主張點

第一節 保護貿易使其國產發達於經濟上政治上增進國民之利益

第二節 保護稅防經濟界有激變爲救濟恐慌之策

第三節 國民之必需品及戰時軍用品不可仰給於外國

第四節 外國輸入品有課稅之必要者爲補償賦課國產之租稅也

第六章 對於保護貿易之反對論點

第一節 保護政策反於所謂一般自然之通則

第二節 設保護策之後一旦廢止之則企業家及勞動者有大招損失之虞

第三節 保護策增長國民之依賴心而消磨獨立進取之精神

第四節 保護策之輸入稅實際內國人負擔之

第五節 保護政策不能應保護程度而施之以公平致生不足或過當之結果

第六節 行保護政策時不顧本國國土富源之程度爲失策

第七章 斷論

第一節 國家產業發達之程度及社會生活之狀態

第二節 一國經濟發達之歷史上次序

第三節 結論

畢業論文
自由保護貿易得失論

緒論

著者 錢應清

經濟上之原理原則。單以人與自然界。或以人與人普遍之關係而立者。其關係固不必如諸國國民定以政治團體爲基礎也。然所謂國家政策者。固欲自國民之經濟實體。達其經濟之理想。有方法。有手段。非就國家之利害爲立論之根據不可。今之所執自由保護貿易之得失論者。孰利孰害。聚訟紛如。孤想冥行。莫衷壹是。蓋以利害標準之所在。舍國民全體之經濟以外而鑽研之。是墮埴索塗而茫乎不得畔岸也。夫國民全體之經濟云者。必常印國家之觀念於其腦中。以個人而爲國家。亦以國家而爲個人。國家與個人間。兩相維持而始得完。全國家之政策。有時若不利於個人。而揆諸久遠。則國民之幸福。以是而增進。權力以是而膨脹。國家之利益。要即個人之利益也。持對外政策之應以國家爲前提者。固於實際上理論上。爲至當而不易。凡國於地球上者。其歷史。其人種。人口。其國產地勢氣候。互有不同。其政策亦因是而異。以各殊之政

策。爲通則的理論而研究之也易。通則者。謂任何學術而概可發見其原則。何也。其質性雖雜。非以共通之原則爲抽象。其定義固無一而存。蓋商業政策論發達之程度。雖至今不得謂一獨立之學術。而猶謂其原則。不得以抽象的論者。非篤論也。

世之論者。採世界經濟統一主義。以各國將來有統一之時期。斷斷焉研究各國貿易政策者。殆非切要。噫。是實虛懸無薄。徒托空漠之理想耳。以如是理想。迴遡既往。而證將來必然之趨勢。甚悠遠而不可幾。吾人研究之要點。固現在之問題。現在之利害。現在之政策。近世國家思想。日益發達。列強競探帝國主義以相角逐。凡政治上經濟上之利害關係。其勢愈迫。其機愈危。不是之顧。而放言高論。謂足以今日之現象。個矚未來之結果。大同世界。一蹴而即是。是足當吾人之一嚆耶。要之。以國家之觀念爲基礎。傾全力於國際商業政策者。其今日之急務乎。

第一章 外國商政之沿革

德國萊布大學教授。柏黑爾氏。以生產與消費距離之關係。分人類經濟之發達期。第一爲孤立經濟時代。第二爲都府經濟時代。第三爲國民經濟時代是也。原始時代。以人類之血統關係。團體生活。爲一家族。家族內之需要。祇以家族內之生產物供給之。其外則概視爲仇敵。爭鬪掠奪。奴隸之不足。復殺戮之。不獨不以己族之生產物。輸出於外。更剝攘他族所有者。以滿足其唯一之種族。致固有商業之原始狀態。與奪掠主義 Spoilsystem 相混淆。此爲商政最黑暗時代。自此進步。用平和手段。發起種族間之交換及媒介者。有外商款待之事。各族相貿易。彼此相協議。漸得有通商特權。及商業居留地者。凡爲對外商政之萌芽。社會團體之所由發展也。

古之歐亞人民。盛營商業者。爲腓尼基亞。阿拉伯。希臘羅馬等。腓尼基亞人。主航海商業。阿拉伯人。營陸上陸商。其後從事航海商業者。希臘人也。希臘政體之特色。最有影響於經濟上者。爲都府組織。就中如雅典國。貨幣盛行。其所由致食物之豐富者。採制

限食料品輸出政策。保護輸入穀物之船舶。以防海賊。復對於入港諸商船。無積貨者。布禁貸金之法律。凡確使食物無外溢也。試觀其盛時。輸出入之關稅。及其他制度。即知其貿易政策。爲一種之保護主義云。

繼希臘而爲世界商業之中心者。羅馬人也。羅馬人以兵力征服四隣。卒滅當時執商業牛耳之哥薩什民族。貿易主權。概歸掌握。且席戰勝之餘威。成世界統一之大業。其領域廣大。道路便利。政治合一。遂於絕大之範圍內。成自由貿易區域。故世界商業之盛。迄十八世紀。罕見其匹焉。

其後羅馬帝國分裂。東羅馬雖獎勵貿易。盡歐亞「商界棧通」Commission trade 者之職。然第爲財政上之手段。其弊也官吏專橫。阻力叢生。卒不能占商業史上重要之地位。其真有遠紹羅馬文明。樹地中海上貿易主權者。惟南歐伊大利市府。傑諾亞比撒及威尼斯等。其尤著也。

威尼斯商業。極一時盛大。後日西歐諸國所採之重商主義。Mercantile system 皆濫觴於其政策云。蓋威人所營貿易。就輸入東洋之貨物。更分布於歐洲各地。其政策。不

僅以楛通商界爲主眼。且注意獎勵工業。俾原料品之輸入。及製造品之輸出。各得其便。爲後世政策所模範。即如北歐。文明之潮流。由自足的家族經濟。移於都府經濟。中古末期之漢撒同盟。藉同盟市府之結合力。圖商人生命財產之安全。得建設商業居留地。免納重稅之特權。卒以強力占政治上優勢者。要皆都府經濟之事實也。

自都府經濟之發達。移於國民經濟完成之時期。總括各經濟團體。於商權樹立上。用競爭手段。曰重商主義之政策。

重商主義。助國民經濟之成立。爲統一國家內部所不可缺者。既統一矣。與各都府特權不能兩立。故國民之內部。互相交通。商業之制限。馴至解放。如法國哥盤爾。先撤內國關稅。除國民經濟成立之障害是。雖然對於外部。應以國民經濟團體爲競爭。故必執制限的之政策。如英國克林威爾之航海條例。其最著也。其結果。內國商業。蒸蒸日上。從來之都府經濟政策。一變爲重商主義之政策。

通十六十七十八三世紀。各國皆施此政策。期國民經濟之完成。雖其內容如法國之干涉主義。與英國之不挫個人企業。方策互殊。然向國民經濟之軌道而進行者。一也。

逮十九世紀初葉。始成國民統一之偉業者不少。自各國民經濟之完成。而人類經濟之發展。尙邁往奮進。無一息之停。更自孤立的國民經濟。進於世界的國民經濟。其相互之關係。愈密接。愈複雜。而現時之國際貿易以成。

夫溯重商主義之本意。初非對外國貿易而加以制限。其顯爲貿易政策者。以禁止金銀之輸出爲始。自此進步。始及於外國。即爲禁止輸入獎勵輸出等之干涉政策。是皆鑑於當時之國勢而不容已也。踰此時代。人事多變遷。而不適於用。遂有自然廢止之勢。法相哥盤爾極端採此政策。後國家濫用其權力。人民自然之發達。因是阻遏。旋於學理上實際上。起反對之聲。商業家亦苦於干涉。希得營業之自由。遂與農業家。相率而唱自由貿易之說。

當時有學派一。代表實際之利害。即法王路易十五世之侍醫克什納 Quesney 其人。也。氏唱導自然法則。自由放任之說。攻擊重商主義。而樹立重農主義。 Physiocrat

System 其後路易十六世時。

千七百七十四年
至七十六年

大藏大臣智爾谷氏熱心採此學說。而

實際適用之。遂稍放貿易自由之曙光於法蘭西。

次之英吉利。有名之斯密亞丹。以勞力爲經濟基礎。主分業之利。論私益心作用。唱導產業之放任。故自由貿易主義。天賦權利諸說。益張其幟。後之學者。如里喀多、馬爾薩及穆勒等。皆演繹此主義。迄千八百四十九年。英國藉畢爾克、武典、武雷士等。政治家之大力。廢止穀令。Coin Law。而自由貿易主義之政策。於是實行。

千八百六十年。英法兩國間締結自由通商條約。法國利用此機。弛輸入禁。且免煤鐵之輸入稅。後六十二年。普魯士亦與法訂約。德意志聯邦之關稅同盟。頗破除禁錮。爲貿易界開一生面。迄七十七年。廢加工鐵之輸入稅。

自由貿易之風潮。滔滔汨汨。波及於歐洲大陸諸國。其勢極洶湧浩瀚。而無可抵禦。然不久而反動的商政以起。

起現時反動的商政者。於歐大陸諸國。其原因各殊。然不外財政上影響。及經濟上變遷而已。

法國於普法媾和後。約納五千億弗朗償金於德。日夜孳孳。求財源於關稅者。當然之勢也。且當時以保護稅論者智爾、司、財、政。其焰更甚。千八百七十五年。設調查委員會。

俾查關於西歐通商條約之事。八十一年。改正國定稅率。日傾於保護主義。其趨勢。以穀物家畜輸入稅之高大而著。

德國當普法戰時。自由貿易論者德布律克執政。『佛期克福得』和約第十一條。規定二國互許條約中之各國。利益均霑。其後數年間。爲商工業繁盛時期。千八百七十五年。至七十九年間。大陸風雲。變幻倏忽。德國新興之工業。受外國激烈之競爭。唱保護稅者羣衆。蓋交通之便利。爲促商政變遷之動機。大西洋航路。與美俄兩國鐵道。日益發達。廉價之穀物。得輸入於歐洲。農業家多要求保護。與商工業相伴而促自由政策之廢止。

與國經千八百七十三年恐慌 *Panic* 以後。特高關稅率。傾於保護主義。美國及新大陸諸國。亦採之。千八百九十年。達於與歐洲諸國通商條約之完滿期。而始臻極點。英國最近之商政。亦自歐大陸反動的商政以來。呈一變象。英於十九世紀前葉。撤穀令廢航海例之政策。非爲斯密氏等學說所激發。祇以本國工業之發達。製造品得於外國市場。大占優勢。其所採政策之全力之傾注。務令穀物得自由輸入。助工業之完

成。而農業利害。不足復措意。繼而本國製造品之販路。爲外國工業所奪。反對自由貿易之論者。其勢焰遽增。

自由貿易反對論者之說。一時無顯著之政策。及千八百八十七年據商標條例。Merchandise marks act 英國輸入品之商標上。明記其原產地名。防德國品之輸入。九十七年以監獄製作品條例。Prisonmade goods act 禁止外國監獄品之輸入。防獸疫傳播。並發家畜輸入之法令。爲阻止外國品競爭之手段。其外國品競爭。於英爲特應注意之問題者。無他其屬地也。廣。性質上非必如他國策略。防外品之輸入於其市場。第以外國競爭烈。則奪英國品在外國（即殖民地）之販路。此問題。爲直達帝國主義之一線路。用此主義。以合同英本國與殖民地。更建一大經濟團體之商政。其端緒。以外國競爭之問題而開。千八百八十年立公平貿易同盟。Fair Trade League 其後該同盟主唱者威生脫。於九十一年組織合衆帝國貿易問題。United Empire Trade League 使殖民地與母國。密接貿易上之關係。

此政策。迄千八百九十五年張伯倫氏爲殖民大臣。始有實行之機。氏於九十六年全

國商業會議所聯合會。及翌年殖民地首相會議時。討論帝國關稅同盟之問題。千九百二年。英皇行戴冠式時。殖民地首相會議。更議母國與殖民地間。密接貿易上關係之法。令各殖民地。以差別關稅法。獎勵母國製造品之輸入稅。

循是以往。生最大變動者。如千九百三年。英國議會。大藏大臣勒的氏。擬撤回穀物輸入稅。因激起有力之反對論是也。即爲英杜戰後。財政支絀。千九百二年議會。就六十年前已廢止之穀稅。以彌補歲入之不足爲名。得通過之。既不可思議。翌九百三年。其財政大裕。議撤去戰時稅。先以穀稅提出於下院。當時自視察南非歸朝之張伯倫氏。爲保護領袖。主唱穀稅之存續。突於五月十五日。發表其生平抱負。而英國政界之大波瀾。因以捲起。

蓋帝國主義。本胚胎於保護主義。張氏恒懷抱此理想。其蘊蓄極深沈。五月十五日夜。嘗演說於選舉區巴密格。就英國六十年間所採之自由貿易。痛加駁詰。畧云。諸外國以保護政策。苦英國及其殖民地。英國亦當立於準備防禦之地位。就母國與殖民地間。作關稅同盟。定特惠稅則。以當其衝。且英國今日之情勢。與克武典時代絕然相異。

對於德及美之特保護稅。爲繁榮之基礎。應用何策以報復之。此首當研究者。時自由黨總。理斯賓撒氏。大藏大臣勒的氏。頗以特惠關稅爲非。惟首相巴福亞氏及坎拿太。濠洲聯邦。新西蘭等。皆贊成之。凡保守的國民。以近頃貿易政策之不可不變。利用張氏提議之機。共組織保護政策協會。二十五有力之製造家。復加盟於茲。遂令張氏政策。向爲衆矢之的者。一變爲衆望所歸。而着着見其實行。夫氏等所以取保護方針者。非以德美諸國。商工業之進步速。英國人心。於商業上對外競爭。日漸讓步。舊有之貿易政策爲不可恃耶。

保護政策之問題。業如上述。貿易爲世界上重大之事。彼狃於習慣。樂於保守之英民。而亦變現時政策者。洵非偶然也。然則此貿易問題。當論自由保護兩政策之利害得失時。宜深注意焉。

第二章 外國貿易上之二大主義

外國貿易。爲國際間貨物之交換。國字云者。政治區域間之貿易也。國家各保其地位。占其勢力。爲政治上之必要。故各國相競而鞏固其國內之經濟。即一國家與外國貿易。不可不加制限以圖本國產業之發達。此干涉保護說所由起也。彼重視個人自由之學派。以爲人類社會。有天然理法。此理法。實人生不易之標準。設背之而行。不惟無功。抑且有招損失流毒害之虞。凡設人定法以逆此天然之理者。非計之得也。國際貿易。亦據此理。以放任其自然之爲優。於是有所謂放任自由說者出焉。此自由保護兩主義。汎涉於經濟上之各事項。而於外國貿易上。其議論尤沸騰一時。

第一節 自由保護貿易之意義及其趨勢

自由貿易者。不立制限。任人民便利。以與外國人通商之謂。保護貿易者。向外國輸入品。特課重稅。高市價。防其自由輸入。令內國資本家。免外國競爭。或爲擴張國產物於外國市場之販路。供給之以低價。施諸種方法。獎勵補助其國產發達之謂。此二者。學

說上凡分兩派。羣議紛挐。莫衷一是。雖然。事不可偏於一見。袒護之者非傾陷之者亦非。捨短取長。實得其中。夫以最少之勞費。得最大之滿足。經濟行爲之大方針也。副此方針。莫如國民各以其最適之才能。從事最適於其國之產業。分勞協力。與他國有無相通。難易相補。此即人類莫大之幸福耳。如保護論者所言。防外國品之輸入。凡不適於其國者。亦加保護。則用力多而成功少。徒高其價。而無以滿足人之慾望。況諸國風土相殊。其物產亦異。產於東而不得於西。或於甲地費小而乙地費大。使不任交換自由。則各國特產物品。徒棄其自然之利。而不能盡其所長。何如各從所適。使生產盛大之爲優。自由貿易論之得占優點者此也。

雖然自由貿易亦不得概謂無弊。於此有一國焉。適於毛布製造業。但國民未知其利。無營之者。即營之。以乏經驗故。亦不能與外國所輸入者。互相角逐。因是進步少而利益之途塞。當此時。政府爲濬其源。以是爲適於己國。不難駕外國品而上之。即課輸入毛布以保護稅。就國內製造家。獎勵而補助之。由是毛布製造之業開。浸以盛大。而足與外國相抗衡。此一時之保護。即永久利益之基也。是爲教育保護之一例。至欲挽回

衰頹之產業。亦同此理。兵器彈藥等軍事上之關係。尤不可聽其自由。要之。偏守一法而空談天然之利。失事物之調和。其不便於政略上者殊多。此近世商業政策之所以趨於保護也。

第二節 自由保護兩貿易主義之分派

自由保護兩主義之起因也。以自然理法。與人爲手段之分歧。流爲個人主義。與國家主義之衝突。前者根據個人天賦之權利。主唱自由貿易。後者置重國家及人民多數之利害。主唱保護貿易。然此二說。各有分派。欲明此派別。而比較其利害。研究其得失。更宜分晰解說之。

第一款 自由貿易派

自由貿易學派。謂一切之經濟關係。放任自然爲最宜。分其派別爲三。

一 絕對的自由派。主張 *Manchester School* 『馬智斯塔』學派者。爲巴的安氏。而實行者。即爲其黨派克武典武雷士也。此二氏採自由主義。全任世界之競爭。令宇內各國。歸於統一的經濟團體。以不藉國力而難發達之產業。爲不利於一國。任

其自消自滅。全不加保護之力。然如現今各國。務增殖國勢。相互競爭之時。其說究不可行。

二 制限的自由派 如斯密亞丹及穆勒氏。主張自由貿易之利益。而亦以保護政策。爲決非無用。一於國防上必要之處。一於外國輸入品之負擔。與內地課稅均平時。即行保護策可也。此說較前項爲穩當。

三 相互主義派 此派之旨。固在自由貿易。然外國制限我物產之輸出。在我對其輸入品。亦當加制限法以實行報復。迨彼此制限之界滅。而後各弛禁令。一任其自由。此互相箝制。而未必能劑其平。實危道也。

第二款 保護貿易派

保護貿易學派所主張者。非尙絕對的保護政策。第一時方便之計。機宜之策而已。干涉保護政畧著名之哥盤爾。尙以是爲出於一時之苟且。謂保護稅如杖然。製造家依以習步行而後拋棄者也。近如學者李士德、魯修爾。皆謂保護者當鑑於產業之發達程度。而施行之爲適當。其派別亦有種種。

一 以保護之目的物爲標準。有論獎勵工業而保護者。有主張商業農業及航海業之保護者。

二 以保護之方法爲根據。有專以輸入品爲可課稅者。或取輸出獎勵金主義。或採助成金制度。或唱廢輸出稅論。或謂原料品之輸入。雖不課稅。精製之輸入。當課禁止稅。

三 因保護方針。分通商主義。互惠主義。復讐主義。教育關稅主義。合同保護主義。緊急保護主義等之別。

四 因保護時期。有一時主義永久主義之別。前者爲本國產業幼稚。不能如他國已發達之廉價。供給以貨物。宜加一時相當之保護。俾避外國品與之競爭。俟完成後。弛保護而使之自由。如育兒然。竭力監督扶助之。俾得獨立於角逐場裏而止。後者永保此主義。即有不利於興業殖產上。亦使國民蒙損害而不顧焉。

如上所述。於同學派中。議論分歧。漫無統一。況自由保護二大派。本立於正反對之地位。冰炭各不相容。古之學者及政治家。各堅其壘。張其幟。而轉輾駁擊無已時者。寔足

怪耶。

自由保護貿易得失論

十八

第二章 自由貿易論者之主張點及其評論

自由貿易論者之根本思想。謂人類本利己心之作用。藉天與之能力。以自由勞動。其勞動所得之生產物。宜使之自由交換。不可拘束其行爲。蓋使國民盡其力以專務適己之業。於競爭上不復加以制限。乃人民至大之幸福。爲此說者。專據分業及競爭之利益。併個人之權利等而言之也。今試詮次敘述以竟其說。

第一節 自由貿易有完全分業之理之利益

人類於衣食住以外。因復欲充其諸種慾望。務求供給物之豐富而後快。否則即慷慨不足。此恒情也。但人之才有短長。有能不能。應其才而捨短從長。其利也事半功倍。且得以有餘補不足。使人人遂其所欲。而個人間之交換。乃與分業之道不可離。此蓋爲互增生產力之原因。不獨適用於個人。即國際間亦同此關係。自由貿易盛。而市場賴以擴張者。此分業之最良手段也。各國天與之富源。於其性質及實體之配置。互有不同。氣候風土河海鑛山之地位品質。土地之肥瘠等。既有天然之差異。即資本多寡。勞

力勤惰。技術手藝之適否等。關於人爲之點。更不免懸殊。凡歐洲寒帶諸國。必仰飲料品。如茶珈之供給於熱帶殖民地。而熱帶殖民地。因乏於必需之煤鐵等。故無以興工業。勢必受歐洲諸國製造品之供給。而後彼此得以本國領土內所不能生產者。供其消費焉。

且自由貿易之目的。不唯得國內所不能產之物品。且因天然富源之分賦。人間之自利心。於同一貨物。可考知各國生產作用之同異。彼此得互爲改良。苟從事於作用較優者。其結果也交換必能便利。如是則各國可專事於產費較廉者。以擴大其貿易。而共享國際分業之利。夫國際分業者。即如甲國從事於粗生品。乙國從事於製造及商業。近頃莫稱商工業國。法及意號美術國。美及奧以農業著名。其先例也。拉威列氏曰。自由貿易者。所以適用分業之利於全國民。使充其利益。增加國民之繁榮。刺氏學二福塞脫氏曰。一國內各地之人民。以其本地所產物。與他處自由交易。則得利。經濟三頁(一)凡向所不能取得之物品。由自由貿易法而得以吸收之。(二)較本地之產出者。得以廉價

獲諸種物品。福氏經濟學四八頁

要之。綜諸家學說。凡分業者。於個人間及國際間。其利益極薄。即品精價廉之一元素也。蓋分業盛則生產之費用減。費減則物品之價格低。其利如斯。而欲於國際間行之。非撤去一切輸出入之制限稅。使外國貿易。一任於自由不可。是實自由貿易論主張點之一也。

第二節 自由貿易保存個人天賦之權利

主張自由貿易論者。一稱天賦權利論。其論之根據。謂人類有交換其物產之天賦權利。如保護海關稅。即侵害其權利者也。更有自實利上援助此權利論之學派。謂貿易上之束縛。實侵天賦之自由。於理爲不正。不正則失策也甚。漢斯鉄布爾氏分爲抽象上之權利論。與便宜上之權利論。前者以法國經濟學家巴的安氏爲主唱。後者以斯密亞丹氏爲代表。巴氏以爲法國關稅局。於比利時所輸入之產鐵。徵集海關稅。是猶運輸貨物。乘途中而掠奪之。直竊盜行爲耳。何則侵害其所有之權利一也。且充類以至於盡。國家若禁止財產之交換。則人不可不營孤立之生活。若人人孤立而營生活。剝奪其與世界國民相提攜之利益。不特生氣奄奄。無以躋文明進化之域。且其社

會將復於原始時代。沉淪奴隸之慘域。而永劫不復矣。已既不振。人且束縛之。又何以獨立生存於世界耶。況唱廢止奴隸說以來。法律上道德上。已不認有是。文明進化至於今日。而猶以財產交換。被種種之禁令。是與奴隸主義無所擇。此必不可行者也。夫個人欲享一身之幸福。必有充分之自由。以所有財產權而任我使用。且願費少而獲多者。當然之理也。故於人人欲善價沽廉價求之市場。不許其自由貿易。則無以副買賣之目的。是侵害個人自由交換之利益也。今籌所以保全之。不問其爲內外國之貿易與否。皆當使之自由。以完其權利。此論者所以主張自由貿易。欲以保全個人權利。爲唯一之政策也。

第三節 自由貿易使國民竭力競爭故產業自然發達

孟德斯鳩曰。欲定貨物正當之市價。莫善於競爭。誠至言也。對於內國品。有適宜之外國競爭品。使本國生產者。或爲商敵所刺激。而精益求精。則此品生產之進步必益發達。一國之獨立心與企業心。亦愈開發。其爲効力也甚大。凡從事殖產者。率爲制勝同業之心所鼓舞。若何而節用資本。改良製法。得廉價造出精品。或發明可省勞力之機

械。或發見變化製造品質之化學作用。或採大規模之分業法。以省勞動時間。或求迅速運輸物產之方法。及其他種種改良。皆自由競爭之結果耳。十八十九兩世紀。英美及其他諸國。應用科學新發明。不許發明國以獨占。而各國競爭之進境益速者。固歷歷可數也。蓋舊日之工業爲專賴遺傳的時代。各國類以己國所不能產之物品。仰供給於他國。至一朝機械發明。手足之熟練。失其効力。則諸國皆爭求其原料。自製其機械。而市場得以滿足者。乃自然之趨勢也。故競爭起而精良之物品。足供消費者之需要。其利益亦大。且養成生產者之獨立於無形。反之而生產界無競爭。農工商諸業。頓失其活潑。而進步遂滯。是不獨影響於產業一方面。且及社會全體焉。試細察經濟社會全體之狀態。大率自由競爭而學術工藝。漸次發達。生產法因以改良。以少數費用。得多數貨物。不惟於產業上有生氣。對於外國品亦占優勝之地位。要之競爭之度愈激。則人人思立於角逐場。而自由買賣。圖生產品之改良焉。彼保護稅之動有障害者。可須臾存耶。

第四章 對於自由貿易之反對論點

第一節 放任其幼稚之產業與斷傷自然物無異

小兒與壯者角力。則小兒常負。產業幼稚之國。與產業發達者。於貿易上競爭。必前者仆而後者勝。故欲使幼稚者而發達成長。不可不施教育的保護制度。德國魯修爾氏唱保護工業之教育論者也。其言曰。一國已具政治上獨立之體。而經濟程度。尚在幼稚之時。先當與進步之國相接觸。以吸收其所長。因而採自由貿易主義。輸入先進國文明。俾受刺激於外部。國內製造業之萌芽。得有漸進於發達之徵候。然後利用商業政策。對於外國競爭而善自保護之。則庶乎可耳。蓋當經營工業。其國內資金豐富。且有機械的技術。經驗熟練之勞力。則對於後之企圖斯業。或時正企業之國。常占優勝地位。故其所製成之貨物。較新興國之製造品。得以廉價供給於世界。以妨害新興國之發達。明於是。凡一國而對於他國。不能占對等獨立之地步。其國內之工業。必不能振。非用課稅法。防遏輸入品。令發達內國工業之手段不可用之。而內國產業。始立於

有益地位。令消費者使用之製造品。概成於內國原料。不以我所輸出者。爲外人加工而輸入。庶安全企業家。得期本國產業之發達。

就各人實際觀之。凡未達丁年。無獨立自治之能力時。有家長給以生計之資。撫育而提携之。俾智識備。才力展。而他日得以成長焉。此當然之理也。一國之經濟。亦若是耳。幼稚時代之事業。於其創始時。非有相當之保護。則無以促他日之發達。故干涉政策。屢見於各國。設當工業之基礎未固。放任其自然之成長。則本國產業。將爲外國品所壓倒。其損失也大。且於存在之產業。既不能凌駕他國。以立於同等地位。而成其完全之發達。其未成立者。亦永無勃興之期。天與之富源。而不能開發之。其拋棄之害。可勝言歟。

第二節 自由貿易利於個人而未必利於社會故權利爲薄弱

個人有天賦之權。不可以立法羈束之。其說已陳腐。蓋個人之權利。由國家之保護而全。國家非曲其目的以保護之。乃欲達其目的以保護之也。其目的何在。不外維持公共之秩序。與增進全體之幸福耳。使個人行爲而不反其本旨。則各得有自由處分其

財產權。不然其使用時。或侵害國家社會之利益。政府應干涉而制限之者。理之常也。彼主自由貿易論者。漫不加察。以賣買自由。爲全財產上個人之權利。以保護政策爲侵害之。庸詎知個人之所好。各有不同。徒以財產供賣買之用。非必所以致富強之道也。何則。一私人狃於目前之小利。其性質上或與國家萬年之長計不相副。則循此目的以往。其結果。往往起國民全體之困厄。而浪費大。收入減。信用墜。權威損。遂足陷國家於慘境。當此時。雖令完全個人之財產權。而有害國民全體之利益。其必不可採用也明矣。故欲致國產之豐富。凡利於保護者。即犧牲各個人之權利而不妨執行之。否則偏重個人私利。而不顧國家社會之公益。是爲個人主義之短見。未足談國家政策之資格者也。

第三節 自由貿易論者缺國家的觀念

各國之地理歷史。其狀態不同。有適於農業地理者。有適於商工業地理者。或在農業時代。或在商工業時代。因而有採自由貿易。與採保護貿易之別者。自然之勢也。主自由貿易派之說者。不願各國成立之要素。第以世界萬邦。視爲一大共和國。如法人克

士納巴的安及塞氏等。皆通人類社會之全體而綜論之。立國要素。非所願也。縱觀斯密氏著述之原富。非論各別國民之差異。專論人類全體之性質及原因。彼等思想。蓋欲聯合各殊之商人。以行其統一的世界經濟政策。使撤去通商境界也。詎知經濟學者。有世界的經濟。與國家的經濟。當國民經濟時代。不察歷史。不揆國情。漫欲行世界政策。殆與夏裘而冬葛無異。觀於今日之經濟社會。各國獨立。競保利益。爭奇鬪智。互決勝負。汲汲焉若惟恐後人者。誠以發達國家的經濟學。爲必要也。況外國貿易。本由於各國間之差異。詳言之。外國貿易存立之要件。第一爲各國間地味氣候水利等之自然的差異。第二爲各國國民之技術才能勞力資本等之人爲的差異。今設有產業發展之程度。彼我殆立於同等。天與之富。人爲之力。悉無優劣。則任個人以自由競爭。不難互享其利澤。然一國經濟之發達。其歷史各不同。國於地球上之位置亦異。溫帶地凡適於製造。熱帶地凡利於農業。而外國貿易所採用之政策。亦必準列國之情勢。與其如自由貿易論之空想。爲世界全體人民計。不若計其國民利益之爲優。善哉。德國保護學派。李士德氏。常以國家之思想。印於其腦。有曰國家爲中心。立經濟政策。

者。當先以國家的經濟發達爲目的。蓋一國生產事業。或害個人之利益。全世界生產事業。亦不得無抵觸一國之利益。各有其國而各寶其所有。自此觀念所生之對外政策。固以國際分業絕對的擴張之爲非計也。其結果國家於某物品。雖較之仰給外國。而價昂費鉅。亦不可無自行生產之法耳。李士德氏以本國爲基礎。認保護之必要。固已。即如英國學派里喀多。亦就一般之貿易通則。主唱例外之存在。第前者據相對的國情。後者尙絕對的哲理。其點各異。彼普通經濟學者。單急於純理之闡究。忘相對的關係者。實坐於不知國家觀念爲重大之誤也。

第五章 保護貿易論者之主張點

綜覽全世界貿易之大勢。日趨於保護主義。歐大陸諸國及美利堅等。由此主義所施行之政策。馴致盛大。最近時代。雖以六十年來自由貿易著名之英國。亦將執變更之方針。然此主義此政策。殆與自由貿易互有短長。必非絕對的完善可行也。試於下節先述保護論者所主張。繼述反對論者之要點。

第一節 保護貿易使其國產發達於經濟上政治上增進國民之利益
國無遊民。則生之者衆。我國先哲之言也。欲驅全國人民。使立於生產社會。各盡其職。以顯勞力之結果。此不可不大開利用之途。唱保護論者曰。保護稅者。其効力能使不適當之產業。發生而增殖之。蓋國內產業之衆多。於國民有二利。第一一產業雖未能發達。猶可藉他產業以相補。而不至起國民全體之恐慌。(荒歎)第二驅國內之青年勞働者。得從事適於其性質之事業。

就第一點而論。學者主張用保護稅法。在使一國與多數之外國相貿易。且使諸種產

業。存立於國內。務至某程度。祇以國民經濟爲自足。得免後日荒歉之虞。否則國內重要品之輸出極少。受輸出者之國復寥寥。設關於某國某事業。其市場之狀況。衰頹而不振。則國內之經濟。蒙其影響而受損害者大。故當擴張其影響所及之範圍。而減少損害之度。即運售之路之塞於此者。或有通於彼者以補之。此物品之因劣失敗者。或有他良品以致勝之。此不易之道也。且一產業雖爲自然條件之變動而衰。而國力不因以凋敝。務藉國內產業之繁夥耳。就第二點而論。勞力於經濟事業爲切要。不可須臾離。第勞動者之能力。往往宜此而不宜彼。設誤用之。則勞力多而成功少。將拋棄莫大之利益。故欲增國計者。必人人活動其特有之能力。其能力之所展。即視國內諸種產業。能存在而發達否。產業之種類愈多。人各發揮其長。以協助振興之機會亦愈多。世界大都會。其市廛櫛比。工場林立。爲內外國民所仰給者。蓋不知凡幾。產業所旺盛之區。即勞力所彙集之地。胥是理也。雖然欲達此目的。一國政府。不當任以自然之進行。保護政策。其急務耳。所以統一各地方之小經濟團體。令一國必要之日用品。生產於本國。獨立於經濟上。而享有諸種產業之利也。更自政治上理由觀之。農業者之保

守主義。與工業者之進取主義。常相箝制。而得圖國運之進步。即農民依自然支配其性質。主保守。富於質朴剛健之氣。一朝有事。則不辭勞瘁而勇於奉公。故論兵之強者。必原於農業。第其智巧不足以速進步。較商工業爲劣。蓋商工業主活潑。常能運新思想以自由進行。故文明進化。始於都會。彼圖國者。於進步的商工業。與保守的農業。其不可不並立也如是。

魯修爾曰。以保護策。伸張製造業。不獨利於經濟上。於政治上亦有大利。自人民階級之制度起。古來豪族皆以農維持其勢。於中古歐洲。領有大田圃者。往往獨操政權。以凌駕一切。及市府興。而工業繁榮。其勢大挫。蓋工業所以養成平民進取之元素。含貴族及保守兩主義。以矯正農業之缺點。遂得令國家進於完美之域。然則自政治上觀察之。政府不可不以農業助他之生產也明甚。

如上所述。農工商鼎立策。不惟爲保護論者理論上所主張。政府亦當從經濟及政治兩方面。以圖一國內諸產業之增殖發達。

第二節 保護稅防經濟界有激變爲救濟恐慌之策

有國於此。自保護稅實行之後。不適當之產業。亦發達。繼而大開門戶。營外國貿易。設其國流通多數貨幣。因正貨之輸出超過。國內之物價下落。至與他國相平均。則外國之商品。頻行於內國市場。難保無使內國產業。不得已而停止且減縮也。此狀態。歷年愈久。則資本公司苦於元金之消耗。勞動者。失其糊口之生計。舉國民而瀕於危狀。當此時。金銀之流通。得與外國平均。雖可從事於他適當之事業。然人民之元氣已傷。欲恢復前日之健全。甚非易易。是皆由經濟上急激變化所生之害。今思所以避之。則當取保護政策。制定輸入稅。嚴防外國品之闖入。然後漸次遞下其率。迨數年後。乃變爲自由貿易之狀態。庶不至苦資本公司與勞動者。且可防產業界之慘狀。是即探防衛關稅主義之說。而適用之爲宜。或有以外國貿易。爲完全國際分業之利者。然天下事有利必有害。市場之恐慌。即由分業利益所生。因是有依保護稅。制限外國貿易極端之發達。而恐慌之力以殺。蓋分業之規模過大。因生產與消費遠隔。令供給物品者。豫想前途之所需要。甚爲困難。實近世經濟組織之最大缺點。而國際分業之弊。特其尤甚者。然則即此弊而矯正之。爲今日之緊要問題。美國學者歐卡氏推右說爲保護論者唯

一之論據。有由來也。（歐氏經濟學第（二章八三項））此說於美利堅之國狀。亦適用之。

凡經濟界之發達。猶四季寒暑之迭代。不慎防其急激之變更。則資本損失。往往一蹶而不可復振。故國際分業之革新。其慘狀雖不達於全國荒蕪之極度。而轉業困難之虞。在所不免。可知臨時保護稅之設。亦不得已之措置也。

第三節 國民之必需品及戰時軍用品不可仰給於外國

主張此論說者。諸國民日常生活之必需品。胥依賴外國供給。則於一國政治上之獨立。至爲危道。何也。一旦與敵國開釁。干戈相交。凡關於戰事之外國品。設前途而杜絕其供給。我國民勢不得不屈服。蓋外國貿易。既達於極端。國民所必需品。非仰賴他國不可。今既不得仰賴。而忽遇隔絕及妨遏時。不得已急與其不慣熟之產物。此決非易事。且必起非常之危險者也。英國當拿破侖戰爭以前。其穀物夙仰波蘭印度所供給。一旦有名之 Continental Block 之布告出。遮斷大陸國之與英交通。英國商權。因是撲滅。遂至大蒙困厄。惶遽間就荒廢之田圃而耕作之。亦僅僅保全其孤立之勢而已。美當南北戰爭之際。北部諸州。因南方之棉花。杜絕其輸出。從事不適當之羊毛業。

以代之。此時英國蘭加昔地之紡績工場。大率非常窘急。而棉花饑饉 Cotten Famine 以起。觀於是而豫防之法。即在保護稅之賦課。平日務於國內維持諸種產業。雖熱帶地之特產物。不可得之於溫帶地。然人民之生活。與必不可缺之食料品。皆當就本國而研究其生產法。斯爲治不忘亂之策。苟平日漫不加察。至四隣皆敵。鎖關閉港。則軍糧絕而兵士不能奮鬪於疆場。且國內之老弱。其餓死而轉於溝壑者。恐踵相接。故欲計國民之安全。舍平時保護國產。務使發達。不仰外國物輸入外。無他道也。

更如兵器及其他之軍需品。務當不仰給於外國。以計本國之能自製。造而政府尤必保護之。此斯密氏亦洞囑斯理。置重自衛政策而釐成古之航海條列者以此。

第四節 對外國輸入品有課稅之必要者爲補償賦課國產之租稅也

英國保護論者曰。英國之農夫。較俄爲多。更負擔嚴酷之租稅。蓋以保護稅補償此差額。使本國之生產業。與外國同其負擔者。至當之事也。旨哉言乎。從事於內國商業。不可不納外國競爭者所不負擔之租稅。假令內國產業者。不受此負擔之補償。則不能與外國輸入者。立於同等地位。故欲使內外貨物之平等。必課外國品以同率之輸入。

稅。保護輸入稅之最穩和者。謂權衡於內國租稅之負擔。以及天然人爲兩方面。因生產之條件劣而損失多。使內國產業。對於外而力圖其恢復之地位也。曷以恢復之。即以損失之負擔。爲標準。而課輸入稅。所謂均衡關稅是。凡以勞働保護法所生之負擔。而有補償趣意之社會的保護關稅。亦屬此類。蓋僅課國產稅。而外國物品。概不與於普通一切之賦課。非公平之道。且本國產業之蒙不利者頗多。因償其不利。採輸入稅方法。使外國產物。與內國品分擔其課稅。此論旨亦斯密亞丹所許可也。

本章凡分四節。所述爲保護論有力之主張。今更研究對於保護政策之非難點。

第六章 對於保護貿易之反對論點

第一節 保護政策反於所謂一般自然之通則

論者曰、完全之政府。對於產業。行唯一之天職。在使之自然發達。而不得有一分之干涉。況十八世紀中葉重農學派。始建經濟學基礎之時。不常普及自由放任之學說於社會耶。以爲政治家之本務。惟在制定法律。使無侵永久不變之自然法。而保守確定。蓋政府不干涉產業。一任其自然。而循天理之作用。則生產之發達也自易。斯密亞丹根據分業之利。唱道自由放任。嗣是祖述氏之學者。同一見解。以贊成之。近如濮斯鉄布爾氏曰。各國輸出其優勝之國產。易以輸入其難產之貨物。一般通則也。(濮氏國際一章十頁)即不外以長補短。棄本國所困難者而從事易產者耳。

抑欲計短長相補。有無相通之利。必利用國境距離之道路。俾便於交通。近世文明進步。陸有鐵道。海有汽船。電信之術行而距離時刻。爲之短縮。因是產業之發達著。輸入品制限之關稅。直爲營業上之妨害物。而世界各國。卒不能得天涯比隣之和親。寧非

憾事耶。然則國際間之交易。首當除政府干涉之障壁。俾協於一般自然之通則。務期廉費製物品。而供給庶以饒多。反是者不顧國內之適否。人民之利害。而唯以保護爲宗旨。一切物品。皆須自產。產費之昂。亦所勿計。是雖妬外品之優長。而不思擇己所宜者。精製而輸出之。以互換其利益。其結果直并固有之長而損失焉。何也。營業多而物不精。產費大而品轉劣。直驅國民棄豐饒之地。繁榮之市。以賣買耕作於穢瘠窳敗之區爲得計也。物價騰貴。供給缺乏。既實受其害。而產業之發達。亦終不可期。保護策之徒恃人爲。非背自然法而阻社會之進步耶。

第二節 設保護政策之後一旦廢止之則企業家及勞働者

有大招損失之虞

凡施行保護政策之國。其結果必高內國物價。殺消費利益。即如輸入廉價之穀物時。對於少數地主。徒與以無法之地代。足以苦商工業家。及勞力者。設以此爲永遠之國。是則絕滅之產業。概不得繁榮。既招消費之損害。且於保護稅溫室內。不免養獨占業黴菌之奇毒。蓋一度立於保護之下。凡資本家。及勞力者。於既發達之產業。其希望

保護之程度。熱力益膨漲。而不知所底止。且適用之事業愈多。則代表其利害者成一勢力。左右政治上之方針。而政策之廢止。既極困難。如美國始以產業幼稚爲理由。實行保護政策。其後亦未聞有進於完全圓滿之域。而撤去之。故其保護關稅。即爲美國確乎不拔之政策。何則政府既力爲保護。而又欲廢止之。則從事產業漸盛之企業家及勞働者。不免大蒙其損害。且此輩以保護策而已充分使用之資本勢力。一旦突遭廢棄。則其移轉於他業之困難。實有不可名狀者。

夫產業發達於保護之下。既占確實之地位。進步焉而欲達其獨立經營之目的。即有廢止保護稅之必要。穆勒勿論矣。李士德亦主張適用保護之期。以限於一時爲宜。然則論保護之永久存續者。實爲保全企業勞力之利益所束縛。反不如自由政策爲得計也。

第三節 保護策增長國民之依賴心而消磨獨立進取之精神

保護貿易派之說。以保護爲增進國家觀念。國家爲人民而存。人民爲國家而存。二者相須相依。得進於發達幸福之域。此論雖似允當。顧觀其實際。則不適於理之言也。試

一執此政策而行之。吾恐令全體國民。無不望國家之保護。於生產方面。阻害其獨立自助之精神。一團體。受國家之保護而發達。他團體亦要求同等之保護。其理自蔓延而不絕。且保護貨物對於他之事業。有原料品或補助品之關係。於此而得保護。他即可援例以求。保護之範圍。益不得不擴大。此足見人民依賴政府之心。自然增長。而全無獨立經營之能力也。

夫保護之目的。在興起不能自立之事。若既具自立能力。則後起之新規工業。不當一一保護也明矣。例如棉絲紡績工業。既充分發達。進而求技術之進步。營同類之毛紡績業。不可置保護稅。如李士德所論之保護時代。凡事業被保護者。範圍皆狹小也。其結果。國民經濟大發達後。各個人得自由競爭。再歸於自由貿易主義。此純爲產業世界統一時代之準備。不然。因輸入之禁止。內國生產。未曾受外國競爭所刺激。其資本家勞動者。必不能熱心從事。而市場之狀況。因是衰落。國民之志氣。因是卑陋。有一任國家之束縛而已。

由此觀之。欲國民完全達於殖產興業之域。必任其獨立經營。否則保護即所以障害

之也。

第四節 保護策之輸入稅實際內國人負擔之

保護學派論者謂保護稅由外人所負擔。內國人絕不蒙損失也。然保護稅之結局。國內生產者得高其物價。至與外國品價格相同。故消費者自有不可不以高價求物之勢。曷言之。對於輸入品之課稅。為消費者之支拂也無疑。其消費者。非外國人而為受輸入品之內國人也。亦無疑。或謂此足令外國人以輸入品。失其與國產物交換之便利。似也。然國際貿易。惟利於此不利於彼。則不能成立。外人縱甘受輸入稅之損失。而運輸物品間。關遠道較。平均之利潤尚低。即不能久營其貿易。故有海關之課稅。輸入品必以高價售之。物品既騰貴。消費者之購其物。勢亦不得不償以高價。蓋一國之產業。非為之保護。因而輸入稅。即不得達其目的。彼論者。猶為保護稅之非以昂物價。是大誤耳。凡物品之國際價格。因貿易國需供之平均而定。輸入國對於輸入品需要之強弱。直可定關稅為內外人負擔之比例。西傑威克氏有云。輸入稅於買方獨占 *Buyers monopoly* 得轉嫁於外人。其他則國人常負擔其大部。此第就一般輸入稅言之。

若保護效果之課稅。其負擔爲內國消費者明甚。抑保護內國產業。必使輸入品之價。與內國之生產費相同。昂其輸入品之價。即使消費者爲負擔租稅者耳。要之保護稅。無不歸內國人民負擔之。否則不能舉保護之實效也。

第五節 保護政策不能應保護程度而施之以公平

致生不足或過當之結果

保護稅者。於一產業。其保護之程度益進。他種產業。亦擴張保護之範圍。是所謂累積的 (Cumulation) 作用也。蓋被保護者。往往偏於依賴而不復計生產之改良。特外國產業獨精其器械。減其產費。即課以關稅。物價僅高至輸入稅額。而外國之競爭品。仍不改其輸入之方針。彼從事國產者。類以一度保護爲不足。再三請求其增加而不已。如法德及他諸國。保護農業之程度。日益加厚。殆無際限。對於工業之保護亦然。前者之結果。使食料品及原料品補助品之價格騰貴。因之後者製造品之產費亦增加。其售價加入以保護稅額而昂貴。致保護之不足。群起而籲告。

加之一產業被保護。則相與關係之產業。緣例以求。非爲要求保護之導火線而何。故

以消費頗廣之貨物。爲保護目的。其影響必爲累積的作用。由斯影響之錯雜。而行保護政策。則各種之產業。勢必至不公平不均衡而後已。於此而欲定若者宜保護之。若者則否。實際上固憂憂乎其難之。

抑對於一產業。保護之程度。各何而定。產業上各守秘密。其當業者雖自知己所需保護之程度。而於議會提議時。往往因諸產業之代表者。相率而請求。遂不能區別產業之性質。至保護不免過當。其結果不問此產業於前途有大希望否。而概施以保護。因是進取之志衰。而物品粗劣。改良無術。永不堪與外國相競爭焉。

第六節 行保護政策時不顧本國國土富源之程度爲失策

保護論者曰。欲矯正國際分業之弊。減恐慌之度。莫善於取保護策。組織自足的國民經濟。此實不審國情之言也。觀於美國。土地廣大。農產物之種類繁夥。工藝品亦發達。屢駁焉有凌駕英國之勢。即以保護策。爲自足的國民經濟計。良不甚難。若施之於物產劣少之國。則第組織狹小之經濟範圍於國民發達大。生阻害且。如美國之製鐵業。實使其人民大蒙損害也。千八百七十年。美以製造地。鐵所用之資金。凡五千六

百十萬弗。其使役勞力者約二萬七千五百五十七人。其傭賃千二百四十萬弗。地鐵之進口稅。以一噸課九弗。計其所製造之地鐵。凡二百萬噸也。今若以資金與勞力。從事麥及木棉之生產。不課進口稅而輸進地鐵。則當以其所減千八百萬弗之廉價。而得購地鐵二百萬噸也。若全止製鐵業。廢進口稅。而輸入地鐵。則美國人民。不使役勞力。給彼等以千二百四十萬弗。以其時賃銀相當之營業所得率。假爲七分。以其總資本額之利率。三百九十二萬七千弗。給製鐵業者。尙當爲地鐵之廉價。而得利百六十七萬二千弗矣。美國之保護鐵業。因妨國民生計。致令其尙寬大保護策之民主黨 Democrat 議廢鐵業。乃與共和黨 Republican 之極端保護論。互不相容。蓋因國內分業。至經濟充分發達時。除外國自由貿易外。不能發展其民力之膨脹。必棄自足的政策。而後得完全。以達於繁盛之域。否則設保護稅率。其制定時。未嘗不統計內外國生產費之差額。而求其符合。然局凡屢變。而因是差異。遂起國內獨占之勢。此觀於英法兩國近來之狀況可知。況保護稅之於小國。更足以妨國民之發達。而大招恐慌耶。要之不顧國土大小。及物產豐歉。漫置保護稅者。非計之得也。

第七章 斷論

通覽以上自由保護貿易論者之意見。及其爭點。皆有理由。孰是孰非。未易斷也。要之。自由貿易論者。斥保護干涉之不法。而罔顧國情。保護貿易論者。排自由放任之非道。而不審原理。兩者共異其根本觀念。遂各偏執主義。有互趨極端之弊。是實主張已說。不自知其然而陷於此也。要之於各反對說。固不無幾許之價值。其竭力排斥他說者。第爲反對的感情所刺激。而忽其眞理所在也。苟學者捨感情而爲理性的判斷。樹一定之標準。應於國家社會之狀態。而研求學說。要當取反對派所長。而兼容并包之也。夫國際貿易政策。本以對於外國貿易。發達本國之經濟。強固其政治上之位置。爲目的者也。故不得以他國人民。而犧牲本國貿易之利益。近世貿易政策問題之發生。全由國家思想之奮興。國家思想。隨人民文化之程度。而有強弱。今日文明進步之諸國。思想強。故其貿易政策。務致國家隆盛爲標準。設推想於今世紀後。現代列國並峙之此局。一變而萬邦統。一成世界共和國。則思想之發展。隨時事爲變遷。現時貿易政策。

無復可以成立也。是未可知。第今固不能見諸實行。近時之政策。當以本國國民爲中心。點應保護者則干涉之。應自由者則放任之。是當衷於國情與方法而辨其異同也。

第一節 國家產業發達之程度及社會生活之狀態

德國保護學派李士德氏所主張國民經濟發達之五時期。爲第一漁獵第二牧畜第三農業。第四農工業。第五農工商時代。此五時期適用之貿易政策。（但農業時代以前。國家尙未統一。故其政策適用之期別。尙不適當。茲所論者以農業時代始。）於農業爲主之國民。當與進步之國民通商。採自由貿易。庶脫野蠻狀態。以漸進於文明。且爲改良本國農業之手段。由第三至第四。所謂農工業過渡之時代。須採保護政策。以期本國製造業及航海業之進步。洎最終時期。富源及國力。已達於最高點。再採自由貿易。俾內外市場之競爭。概無制限。以刺激其已得之勢力。約而論之。歐洲西葡兩國。在第三期。德意志美利堅。尙位於第四期。法蘭西將進於第五期。唯英國達於最終期。蓋今日各國之立於國際競爭間者。不惟其天然之利。地理之勢。顯有差異。且人口之多少。物產之種類。人民需要之性質。智力。勤勞。學術等。亦無由劑其平。故取號稱文明

之國而比較之。產業上至同等之點。增殖並進者尙少。舊開國之農工業。與新開國之相去也遠。蓋舊開國由藝術智識之發展。機械蒸汽力之使用。着着占優勝之地位。其製造品日向農業國而輸出。以與原料品之輸入相交換。故由商工業基本上言之。恒利於自由貿易。然以其國之農業。被新開國所壓倒。非力爲保護。則無以扶衰而救弊。政策繁曠。於何折衷。是當參酌一國全體之利害而斷。

反是新興之農業國。其農產物富。於貿易上得占自由輸出之勝利。然內國製造業。稍稍振興時。與已發達之工業國。試其競爭。則其仆也可立而待。何則新產業國之於製造之經驗。使用機械之職工之智巧。概未發達。其製品精良。估價低廉。遠不逮先進國故也。即如工業繁盛之英國。當前世紀中葉。麻布之製造極拙。其內地需用品。多自外國輸入。始終加重厚之保護。而僅得存立。今則一躍而駸駸乎凌駕法國矣。

更觀於英之康尼古氏。自赴巴黎會。法國執政布爾勒氏。談自由貿易之利。勸其力倣已國。時布氏謝絕之。述其答辭大略如左。

英國以今日進步。其禁令漸弛。一任他國之競爭。不至背馳於國利。然今倣邦工業。

尙不逮貴國之發達。故利於重加庇護。設稍進步。而不以他國競爭爲慮。當謹傲貴

邦之例。(德國李士德經濟論二四八頁)

由是觀之。貿易政策。應國家產業發達之程度而有變遷。決非一成不易也。詳言之。國家之膨漲力有大小。斯所執之政策有變化耳。某時代執保護政策。其進步也速。泊乎時移勢遷。墨守成規。則爲害於國民也轉大。故國家於實業教育。工業上智識。已極進化。科學技術。爭相發明。種種產業。均達於繁榮之域。其國因是得列於世界列強間。貿易上亦得逞個人之自由競爭。否則處幼稚時代。國民之生活程度極低。因陋就簡。各安其居。以本國民之製造品。供給本國民之需要而已足。設一旦有外品闖入。則內國生產力微薄。必不能抵抗之。於是有力者出。而爲之防禦。補其不足。助其成長。此極端的保護政策之可恃爲後盾也。第於產業程度發達之強國間。慎毋忘相對的關係。而偏執其政策也可。次之應注意者何也。或有以國家第加保護於其特殊之產業。厚此薄彼。是甚不公。余應之曰。唯唯否否。不然。夫俄爲農業國。英爲工業國。其所恃爲立國之產業者。雖各不同。而特別厚護其主眼之產業者。非以增一國之富強。即間接

保護其他耶。蓋國家同時於各方面不得兼程並進。亦姑擇一途以定其方針耳。

第二節 一國經濟發展之歷史上次序

不論何事物。其進化也。必經相當之秩序。經濟界之發達歷史。亦非可逸此原則之軌道。其通常所踐履之階級。尙別第一期爲一家經濟。第二期爲市府經濟。第三期爲國家經濟。及第四期爲宇內經濟之四時。一家經濟者。以一家爲基礎。行生產分配交易之事。於太古行之。市府經濟者。以市府爲工業商業之中心。於歐洲諸國中古行之。國家經濟者。撤內國各地之障壁。以統一一國。即各國家相對峙。專以一國之利害爲起點。謀本國產業之繁盛也。觀今日諸國。概屬此時期。試更進一步。豫想社會經濟之狀態。其分業區域。廣涉於宇內萬國。不問何國。第於價之最廉處。盛行其生產交易。是即爲第四期宇內經濟時代。若果有之。則經濟恢擴。達於極點。化國境爲烏有。等約章於空文。是爲絕對的交易之自由。

夫第四期宇宙經濟時代。果可一蹴即至乎。試觀列強中有能征服世界諸國。統合地球。僅成一國家社會。如秦始皇之滅六國否耶。噫。宇宙統一主義。非絕代英傑拿破侖

一世所夢想。而失敗之歷史耶。況今日之外交政策。務以列強均勢爲標準。非復弱肉強食時代。仰邇既往。俯察將來。而謂今日以後。必混合世界。組成一大共和國。是尙悠遠而未可以科學之智識。測量其時期也。夫征服的統一。既不可得。則歷史人種感情各異之諸國。勢不能集於一共和政府之下。即曰能之。不久而又將分裂。其杌隍更甚。故使第四期宇宙經濟時代。而果可到達也。則余固馨香頂禮以祝之。無如大同世界。夢想也久。而卒不獲副我之願望。無已。情述今日國家經濟時代之政策乎。

第三節 結論

貿易之盛衰。爲推測國家文野程度之尺度。夫真正之貿易。無論內國外國。概以有餘生產。與不足之他物相交換。俾兩者互享同等之利。誠成立貿易之要素也。然則兩利之貿易。推行盛大。爲世界民族一大幸事。故由其性質上爲根本的研究。終以宇宙經濟。世界統一政策。爲達於其極之目的。假令於二十世紀開幕時。各國皆洞開門戶。許貿易自由。與天下共享平等之洪益。是則貿易之真意義顯。而爲人類偉大之幸福也。雖然是理想未來之黃金世界。而今固非其時。現在之商政。不可不審察現在之國情。

而以本國利益及發展爲政策主眼也。熟察今日歐美諸強國。物質的文明。相互進步。而應用此文明之製造業。益益發達。甲國興一業。乙國直倣造而抵抗之。曾未聞有一國獨占者。如英美兩國。各輸出物品一。其國際價格雖不同。然以有運送金保險料及其他雜費等之損失。輸出入國。共不能大享其利益。因是強國間之競爭。常保平和。非以強制弱之情狀可比。其結果。強國之製造品。勢必向利益獨多之地輸出之。利多之地。即於經濟上力弱者也。凡物體。於抵抗力薄。及比較的抵抗力弱之兩方面。其膨脹特甚。觀水之壓力。當潰決之衝者。必堤坊之最疏懈處。經濟界之壓力亦然。第產業力弱之國。苟完具獨立自衛權。而加意防堵。則外界風潮。雖險惡而無由侵入。如西班牙。葡萄牙。意大利等。得阻止列強產業膨脹力之闖入者。以此列強之力。既對於善防禦者。無能施其技。勢必折而向防禦力更弱之國。以宣洩其尾閘。此歐美諸強國所。由以製造物之贏餘。輸出於亞細亞。阿非利加。南洋羣島諸國。以爲鞏固本國品販路之基礎。且實行其殖民政策也。蓋各國於未開之國。務獲得領土。而擴張商業者。爲民族膨脹不得已之事實。歐美強國中。殆無不抱此野心焉。

自民族膨脹後。有貧富之懸隔。而貧民救濟之問題以起。於此而講補救之方法。即所稱國家社會之帝國主義。是歐西諸國。以其人口增加。國產豐盛。轉向於東亞南美南非及南澳各地。而突進不已者。類皆取此方法耳。第增殖之途既開。一任其自消自長。則輸出者既不止一國。互向其地。而供以同類之貨物。其競爭必劇烈。往往因國際貿易而失敗。致不能逞其產業膨脹之勢力。與保其獨立之國體。故各國於自衛上。概以全力注之。其貿易政策之執極端的自由主義者。尙寥寥也。列國既各擴張本國之勢力。取適當之方策。對付此列強者。（如我國然。苟其實力能防禦。於國際競爭間。應如何保持本國之安全。及圖國力之發展。此當一一注意也。

然則曰保護。曰自由。不論何者。要皆得其時則興。失其法則敗。政策之妙。不外乘時勢之潮流。因實地之順序。應自然之變通。以運用一心耳。彼不顧一國經濟之狀態及情勢。株守自由或保護政策之一。而自爲得計。蓋亦偵甚。經國濟民之術。存乎其人。是烏可以一成不變之主義。推之萬世耶。

畢業論文 **自由保護貿易得失論** 終

自由保護貿易得失論正誤表

和文之部

誤

- 全 緒言三頁一行統一セラルル時期
- 全 十一行 Utopia
- 全 第一章七頁九行十八世紀ニ及テ
- 全 十一頁七行十四世ノ侍醫クエズネ
- 全 十一頁十行チエルゴ
- 全 十六頁六行此政策ノ實行
- 全 十八頁一行自由黨總理
- 全 全 十六頁一行自由政策ヲシテ途ニ着々其實行ヲ現ハ
サシムル
- 全 二十四頁五行事業ニ慣レタル間
- 全 第二章二十五頁十三行ル、一派ノ主唱者ハパスナ
氏ニシテ
- 全 全 二行分岐ヲ以テ
- 全 全 三行衝突ニシテ
- 全 二十九頁一行告ケタル後ニ待チ
- 全 二十九頁六行遊バル所
- 全 全 九行亂所當
- 全 第三章三十一頁八行者ナリ
- 全 三十三頁九行衛生品
- 全 三十五頁五行不正ノモノナリ
- 全 全 十二行譯外ヲ發
- 全 第四章四十一頁三行異ナリナキ
- 全 四十六頁一行豐富ヲ致スル爲
- 全 全 二行状態スルアルモ
- 全 全 六行其状態同カラス
- 全 全 七頁或爾工業時代
- 全 全 四十七頁十行地位ニ立シタル邦
- 全 全 二行國情ヲ照ラサズ
- 全 全 漢文之部
- 全 緒論二頁八行個闕未
- 全 第三章九頁十三行始有實行之機
- 全 全 十一頁二行自由黨總理
- 全 全 十一頁五行而著々見其實行
- 全 第二章十五頁十行注強一馬會學派者
爲巴的安氏而實行者
- 全 第三章二十頁十行兵學三經濟三頁
- 全 第七章四十七頁十二行思想強
- 全 全 十三行此局

和文之部

正

- 全 統一セラルル時期
- 全 Utopian
- 全 其ノ終ニ及テ
- 全 十五世ノ侍醫クエズネ
- 全 チエルゴ
- 全 此政策ノ運命
- 全 自由黨領袖
- 全 氏ノ論旨ヲシテ大ニ世人ノ注意ヲ惹起サシ
ムル
- 全 事業ニ慣レザル間
- 全 ビスチア氏ヲ主トシ、マンチエスター
學派ト稱セラルル、一派ニシテ
- 全 分岐ヨリ
- 全 衝突ニ至ルモノニシテ
- 全 告ケタル後ニ待リ
- 全 遊バル所
- 全 亂所當
- 全 者字衍
- 全 雜製品
- 全 不正ナリ
- 全 子發ニ字衍
- 全 第四章四十一頁三行異ナルナキ
ル字衍
- 全 機性ニスルコトアル、
- 全 其状態同シカラズ
- 全 或ハ商工業時代
- 全 地位ニ立シタル
- 全 國情ニ照ラサズ
- 全 漢文之部
- 全 個闕未
- 全 始有進歩之機
- 全 自由黨領袖
- 全 而後世人ノ注意
- 全 以巴的安氏爲主又稱馬
智斯培學派而實行之者
- 全 刺氏經濟學二三頁
- 全 此思想強
- 全 此字衍

普通警察察法

天津警察學堂畢業生。現任七品警官 無錫丁永鑄編譯。洋裝精本即日出書。

各種警察察章程

無錫丁永鑄編。凡警部各項章程。此書無不備具。洋裝精本即日出書。

萬法精理

方今朝廷特下 明詔。飭我國民。預備立憲。此誠四千年未來之快舉。惟欲預備立憲。非使全國人民盡知法律之原理。其道無

由法儒孟德師鳩為近世學界革新之初祖始創立法司法行法三權分立之說。所著萬法精理一書。包羅萬理。震耀全球。歐洲自出書後。耳目為之一新。每歲重版輒至數十。正今日法學家所當奉為金科玉律。各國皆有譯本。我國桃源張相文君蔚西始從日文譯出書中義理。與孟氏原書。不失毫髮。真我立憲國民不可不讀之書也。書印無多。以備有志研究憲法者購焉。精裝一厚册定價大洋一元五角。

政學士錢應清先生

最新經濟學通論

近刊

著者具高論卓見行之以雄健之筆鋒兼萃英美德法奧及其他內外最新之學說。而取精用宏。斥謬說。決難問。縱橫痛論。深遠廣大。於經濟學之原理應用及沿革。殆無不條分而縷晰也。凡法律政治實業教育諸大家及中學以上各學生。苟繙讀此册。則任何問題。而無不可解答之洵必要之良箬也。

政學士錢應清先生

經濟學各論

近刊

內分貨幣論銀行論外國為替論外國貿易論四編。而貨幣論編中於我國貨幣制度問題尤備論改良方法。此皆研究實際應用為政治界實業界開一大生色。我國學界中未曾有之傑作也。

東亞公司編纂局編譯

清國江蘇 錢應清先生補正

最新世界歷史

全一冊 近刊

最新世界地誌

全一冊 近刊

欲知地球萬國治亂興敗之迹。莫善於歷史。讀歷史者。不詳其地理。譬如無燈而夜行。是書將現時各學堂所應用萬國歷史。萬國地誌。參酌修訂。譯成華文者。則在此種書中。優出特色矣。

發行處

東京日本橋區堀留町丁三番地

東亞公司

發售處

大清國上海天津漢口

東亞公司

分號

批發處

大清國

天津、

奉天、

濟南、

揚州、

各地

東亞書藥局

日本法科大學 助教授法學士 上杉慎吉先生著
高等師範學校 教授文學士 鈴木虎雄先生譯

比較各國憲法論

全一冊

洋裝價洋七角

上杉先生馳名公法學界久矣。先生旁誦中國亦早晚應必行立憲之政也。乃本乎日本憲法比較英、法、德國憲法所定。且參酌北美合衆國、比國、義國憲法而著是書也。試學書內之結構。則自三篇三十三章而成。馮序說。說自國家組成之始。原以至法之概念。第二篇論各國憲法之系統。第三編比較各國憲法條章。且解國體之異同。與臣民權利義務之消長。反覆極親切。今請能文之士。譯出漢文。更囑清國名家。行琢句雕字。其完備可知矣。中國士君子。中究考憲法者。盍試購讀之。

光緒三十三年五月廿五日印刷
 明治四十年七月十五日發行

定價大洋參角正

著作權所有
 翻印必究
 無印者偽版

評閱者 美國哲學博士 鹽澤昌貞
 早稻田大學政學科教務主任講師

著者 錢應清
 早稻田大學政學士

發行者 楊沐霖
 日本東京淺草區墨船町廿八番地

印刷者 池田宗平
 日本東京淺草區墨船町廿八番地

印刷所 並木活版所

總發行所 上海棋盤街科學書局
 販賣處 東京同文館及上海各書舖
 東京東亞公司

